筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告　第33集　1993年11月

中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成

（その予備的調査2ならびに試行的実践1）

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
石川　祐爾・石塚　　修・鹽谷　　健
鈴木　信好・須藤　　敬・関口　隆一
福田　　孝
東京学芸大学
石井　正己

中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成

（その予備的調査2ならびに試行的実践1）

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
石川　祐爾・石塚　修・鹽谷　健
鈴木　信好・須藤　敬・関口　隆一
福田　孝
東京学芸大学
石井　正己

1．はじめに

本校国語科では中・高6ヶ年を見通した教材編成を研究プロジェクトとして進めており，現在は古典教材の編成をその課題としている。（現代文については既に完成しており，その報告は本校『研究紀要』30・31集でなされている。）

昨年度はその予備的調査1として，古典学習に対する生徒の意識調査，及び古典的素養の程度について調べてみた。その結果，現在の中学・高校生にとって古典がより遠いものになりつつあることを，漠然とした感じではなく具体的数字として押さえることができた。今年度は予備調査をさらに進めるとともに，昨年度の調査結果をふまえ，中学・高校で従来の教材観とは違った観点での教材設定，授業実践を試みてみた。以下がその報告である。

2．古典学習の前提となる素養調査――『小倉百人一首』――

昨年度，「古典学習の前提となる素養調査」として「住居・服飾の名称」「いろはガルタ」に関する調査を行った。本年度も引き続き，中・高校生が古典に関わる興味関心をどの程度持っているかを調べる目安として，『小倉百人一首』をどれ位知っているかを調査した。『小倉百人一首』を対象として選んだ理由は，藤原定家撰ということで中世以降歌人たちが聖典として仰ぎ，近世国学者が作歌・古典の入門書として重んじ，近世以降「歌がるた」と結びついてよく普及し愛玩され，古典作品の代表選手といってよい存在であるからである。また中学校・高校で教科として「古典」を習う以前に，生徒が古典和歌にはじめて接するものであろうからである。『百人一首』を教材として現場で用いるむきも多いが，一体生徒がどの位『百人一首』に接しており，どの位慣れ親しんでいるのかを知ることによって，生徒と古典の距離がどれ位のものであるかを知る目安としようと考えた訳である。

〔調査法〕

百首それぞれの第三句目を空欄にし，そこに補充させる方法をとった。上句下句を結びつけさせる，とか，何句目かを空欄にし該当句を選択させて答えさせるという方法も考えたが，うろ覚えで答えられて実態を把握できないよりは確実に生徒に定着している度合を把握したいと考えたからであり，第三句目を空欄にしたのはかるた遊びのために第一句目と第四句目だけを照応させて覚えているといった類を避けようとしたためである。漢字・仮名遣いといった表記面にはこだわらず，とにかく覚えているかどうかだけを点検した。1993年９月，中学１年生から高校２年生までの５学年全クラスを対象に実施し，時間は約20分間として，学校裁量時間をこれに充てた。

また追加の質問として以下に挙げる，『百人一首』に関するアンケートも同時に実施した。

〔アンケートの内容と結果〕

「百人一首」に関するアンケート

○君は「百人一首」を覚えたことがありますか。

ア　ある　　イ　ない

「ある」場合には、いつごろ・どのようなきっかけで覚えましたか。

いつ（　　　）

きっかけ（　　　）

○君の家に「百人一首かるた」がありますか。

ア　ある　　イ　ない

○「百人一首かるた」をやったことがありますか。

ア　ある　　イ　ない

やったことが「ある」場合には、どこでやりましたか。

ア　家庭で　　イ　幼稚園で

ウ　小学校で　　エ　友達の家で

オ　その他（　　　）

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
人数	122		118		107		347		157		159		316		663	
覚　有	34	27.9	31	26.3	23	21.5	88	25.4	45	28.7	41	25.8	86	27.2	174	26.2
無	88	72.1	87	73.7	84	78.5	259	74.6	112	71.3	118	74.2	230	72.8	489	73.8
かる有	77	63.1	79	66.9	79	73.8	235	67.7	116	73.9	103	64.8	219	69.3	454	68.5
無	45	36.9	39	33.1	28	26.2	112	32.3	41	26.1	56	35.2	97	30.7	209	31.5
経験有	73	59.8	73	61.9	73	68.2	219	63.1	102	65.0	145	91.2	247	78.2	466	70.3
無	49	40.2	45	38.1	34	31.8	128	36.9	55	35.0	14	8.8	69	21.8	197	29.7
どこア	42	34.4	44	37.3	47	43.9	133	38.3	70	44.6	64	40.3	134	42.4	267	40.3
イ	1	0.8	1	0.9	3	2.8	5	1.4	3	1.9	3	1.9	6	1.9	11	1.7
ウ	41	33.6	55	46.6	40	37.4	136	39.2	48	30.6	36	22.6	84	26.6	220	33.2
エ	10	8.2	5	4.2	4	3.7	19	5.5	9	5.7	8	5.0	17	5.4	36	5.4
オ	6	4.9	8	6.8	0	0	14	4.0	27	17.2	94	59.1	121	38.3	135	20.4

*「ある」場合には、いつごろ・どのようなきっかけで覚えましたか。

（括弧内の数字は全て内数）

○いつごろ

	中一	中二	中三	高一	高二
幼稚園で	0	1	3	0	1
小学校で	30	28	17	30	13
（小学校一・二年）	(2)	(4)	(1)	(0)	(0)
（小学校三・四年）	(12)	(5)	(1)	(8)	(5)
（小学校五・六年）	(10)	(12)	(6)	(8)	(3)
中学校で	0	0	0	15	20
（中学校一年）				(0)	(2)
（中学校一年）				(0)	(2)
（中学校三年）				(0)	(3)
昔	0	3	0	2	1
忘れた	2	0	0	0	0

○どのようなきっかけで

	中一	中二	中三	高一	高二
学校に関連して	17	13	12	35	24
（学校の宿題として　）	(0)	(1)	(1)	(4)	(5)
（学校の先生に言われて）	(5)	(3)	(1)	(2)	(0)
（学校の行事として　）	(8)	(0)	(4)	(0)	(0)
（学校の授業を通して　）	(3)	(5)	(2)	(10)	(7)
（クラブに所属していて）	(1)	(1)	(1)	(2)	(0)
（大会があって　）	(0)	(3)	(3)	(17)	(12)
家庭に関連して	8	2	1	6	1
（父母に影響されて　）	(1)	(0)	(1)	(0)	(0)
（兄姉に影響されて　）	(2)	(2)	(0)	(0)	(1)
（親戚に影響されて　）	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)
友人に影響されて	0	0	0	0	1
流行ったから	1	0	0	0	0
早く取れるように	0	3	0	1	0
かっこいいから	1	0	0	0	0
ただあったから	1	1	0	0	0
なんとなく	0	0	0	0	4
ファミコンに関連して	1	0	0	0	0
正月にやるから	2	0	0	0	0

*「（「百人一首かるた」を）やったことが「ある」場合には、どこでやりましたか．」の質問に、
「オ　その他」と答えたものの内訳

	中一	中二	中三	高一	高二
祖父母の家で	1	3	0	1	0
田舎で	1	0	0	0	1
親戚の家で	3	2	0	5	1
クラブで	1	1	0	0	0
公民館で	1	0	0	0	0
中学で	0	0	0	20	92

〔百人一首，（第３句空欄補充）の調査結果)〕

Ⅰ→１～100番歌の各歌毎の正答人数とその百分率

Ⅱ→100首中の正解歌数別の人数とその百分率

（13頁～18頁参照）

〔考察〕

まず，『百人一首』に関するアンケートから見てみると，覚えた経験がある者が26.2％でほぼ１／４に達し，そのきっかけになったものの多くは，「学校に関連して」であることが分かる。また「百人一首かるた」をやったことがある者はほぼ７割である。場所は，家庭が４割，学校が１／３を占めている。家にかるたがあると答えた者が７割近くあるにも関わらず，家庭で行った者が四割であることを考えると，家にかるたがあっても「かるた取り」が毎年正月を彩る行事として行われている訳ではないのであろう。要するに，生徒の『百人一首』との関わり合いは，家もしくは学校で，正月に時おり行われるかるた取り遊びとして触れるだけのものとしてあり，その時その時で接するだけの一過性のものであって内容を理解したり歌を誦んじたりするというものではないようである。覚えようとした者の場合も，学校行事として学校内で行われた大会に備えるか，もしくは先生に覚えるように言われた，といった他発的なものであり，『百人一首』が彼らの生活に浸透しいる程度は極めて低いと言わざるを得ない。

（ちなみに本校では『百人一首』大会といったものを定例化して実施していない。中学生で「中学校で」覚えたと答えている者が０であるのはそのためである。アンケートの対象となった学年のうち，高校２年生だけは中学校３年次の冬に学校で「百人一首大会」を行っており，そのため「中学校で百人一首かるたをやったことがある」の数字が92となっている。各歌の正答率もその

I　「百人一首」各歌毎の正答生徒数と百分率　①

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
1	24	19.7	23	19.5	24	22.4	71	20.5	32	20.4	65	40.9	97	30.7	168	25.3
2	44	36.1	38	32.2	46	43.0	128	36.9	63	40.1	82	51.6	145	45.9	273	41.2
3	19	15.6	28	23.7	19	17.8	66	19.0	32	20.4	59	37.1	91	28.8	157	23.7
4	33	27.0	26	22.0	34	31.8	93	26.8	37	23.6	65	40.9	102	32.3	195	29.4
5	28	23.0	19	16.1	27	25.2	74	21.3	45	28.7	67	42.1	112	35.4	186	28.1
6	10	8.2	7	5.9	9	8.4	26	7.5	18	11.5	26	16.4	44	13.9	70	10.6
7	80	65.6	52	44.1	70	65.4	202	58.2	61	38.9	119	74.8	180	57.0	382	57.6
8	11	9.0	12	10.2	14	13.1	37	10.7	23	14.6	31	19.5	54	17.1	91	13.7
9	34	27.9	32	27.1	36	33.6	102	29.4	41	26.1	74	46.5	115	36.4	217	32.7
10	18	14.8	8	6.8	20	18.7	46	13.3	25	15.9	41	25.8	66	20.9	112	16.9
11	9	7.4	3	2.5	8	7.5	20	5.8	12	7.6	30	18.9	42	13.3	62	9.4
12	9	7.4	4	3.4	9	8.4	22	6.3	21	13.4	30	18.9	51	16.1	73	11.0
13	7	5.7	4	3.4	10	9.4	21	6.1	15	9.6	23	14.5	38	12.0	59	8.9
14	5	4.1	5	4.2	8	7.5	18	5.2	62	39.5	16	10.1	78	24.7	96	14.5
15	14	11.5	21	17.8	13	12.1	48	13.8	32	20.4	31	19.5	63	19.9	111	16.7
16	2	1.6	2	1.7	6	5.6	10	2.9	14	8.9	17	10.7	31	9.8	41	6.2
17	18	14.8	15	12.7	22	20.6	55	15.9	35	22.3	51	32.1	86	27.2	141	21.3
18	7	5.7	4	3.4	10	9.4	21	6.1	16	10.2	23	14.5	39	12.3	60	9.1
19	7	5.7	1	0.9	7	6.5	15	4.3	11	7.0	9	5.7	20	6.3	35	5.3
20	4	3.3	2	1.7	4	3.7	10	2.9	10	6.4	11	6.9	21	6.7	31	4.7
21	5	4.1	3	2.5	8	7.5	16	4.6	12	7.6	13	8.2	25	7.9	41	6.2
22	4	3.3	2	1.7	8	7.5	14	4.0	13	8.3	49	30.8	62	19.6	76	11.5
23	4	3.3	4	3.4	4	3.7	12	3.5	12	7.6	29	18.2	41	13.0	53	8.0
24	8	6.6	7	5.9	8	7.5	23	6.6	14	8.9	28	17.6	42	13.3	65	9.8
25	6	4.9	4	3.4	10	9.4	20	5.8	14	8.9	26	16.4	40	12.7	60	9.1
26	4	3.3	2	1.7	5	4.7	11	3.2	11	7.0	16	10.1	27	8.5	38	5.7
27	6	4.9	4	3.4	6	5.6	16	4.6	18	11.5	16	10.1	34	10.8	50	7.5
28	3	2.5	4	3.4	6	5.6	13	3.8	15	9.6	17	10.7	32	10.1	45	6.8
29	7	5.7	5	4.2	4	3.7	16	4.6	16	10.2	18	11.3	34	10.8	50	7.5
30	4	3.3	3	2.5	6	5.6	13	3.8	17	10.8	71	44.7	88	27.8	101	15.2
31	9	7.4	8	6.8	8	7.5	25	7.2	17	10.8	25	15.7	42	13.3	67	10.1
32	3	2.5	2	1.7	5	4.7	10	2.9	16	10.2	18	11.3	34	10.8	44	6.6
33	12	9.8	44	37.3	45	42.1	101	29.1	59	37.6	98	61.6	157	49.7	258	38.9
34	5	4.1	5	4.2	8	7.5	18	5.2	14	8.9	13	8.2	27	8.5	45	6.8

←アンケート解答者人数

↑「百人一首」の各歌番号

I 「百人一首」各歌毎の正答生徒数と百分率 ②

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
35	3	2.5	5	4.2	7	6.5	15	4.3	16	10.2	26	16.4	42	13.3	57	8.6
36	4	3.3	2	1.7	6	5.6	12	3.5	11	7.0	12	7.6	23	7.3	35	5.3
37	4	3.3	0	0	2	1.9	6	1.7	6	3.8	2	1.3	8	2.5	14	2.1
38	4	3.3	1	0.9	7	6.5	12	3.5	8	5.1	5	3.1	13	4.1	25	3.8
39	7	5.7	6	5.1	7	6.5	20	5.8	14	8.9	12	7.6	26	8.2	46	6.9
40	6	4.9	4	3.4	9	8.4	19	5.5	19	12.1	26	16.4	45	14.2	64	9.7
41	5	4.1	3	2.5	6	5.6	14	4.0	11	7.0	12	7.6	23	7.3	37	5.6
42	6	4.9	5	4.2	11	10.3	22	6.3	18	11.5	16	10.1	34	10.8	56	8.5
43	8	6.6	8	6.8	8	7.5	24	6.9	18	11.5	21	13.2	39	12.3	63	9.5
44	6	4.9	4	3.4	5	4.7	15	4.3	11	7.0	20	12.6	31	9.8	46	6.9
45	4	3.3	2	1.7	4	3.7	10	2.9	11	7.0	6	3.8	17	5.4	27	4.1
46	7	5.7	3	2.5	7	6.5	17	4.9	12	7.6	12	7.6	24	7.6	41	6.2
47	4	3.3	1	0.9	4	3.7	9	2.6	9	5.7	10	6.3	19	6.0	28	4.2
48	6	4.9	6	5.1	5	4.7	17	4.9	9	5.7	8	5.0	17	5.4	34	5.1
49	5	4.1	4	3.4	4	3.7	13	3.8	10	6.4	9	5.7	19	6.0	32	4.8
50	7	5.7	8	6.8	11	10.3	26	7.5	17	10.8	22	13.8	39	12.3	65	9.8
51	7	5.7	7	5.9	7	6.5	21	6.1	14	8.9	13	8.2	27	8.5	48	7.2
52	9	7.4	12	10.2	16	15.0	37	10.7	26	16.6	29	18.2	55	17.4	92	13.9
53	4	3.3	0	0	4	3.7	8	2.3	13	8.3	1	0.6	14	4.4	22	3.3
54	1	0.8	4	3.4	3	2.8	8	2.3	10	6.4	5	3.1	15	4.8	23	3.5
55	6	4.9	5	4.2	11	10.3	22	6.3	13	8.3	17	10.7	30	9.5	52	7.8
56	2	1.6	4	3.4	8	7.5	14	4.0	12	7.6	12	7.6	24	7.6	38	5.7
57	11	9.0	11	9.3	12	11.2	34	9.8	20	12.7	13	8.2	33	10.4	67	10.1
58	5	4.1	1	0.9	3	2.8	9	2.6	10	6.4	6	3.8	16	5.1	25	3.8
59	4	3.3	2	1.7	4	3.7	10	2.9	11	7.0	3	1.9	14	4.4	24	3.6
60	7	5.7	10	8.5	12	11.2	29	8.4	23	14.6	85	53.5	108	34.2	137	20.7
61	18	14.8	15	12.7	25	23.4	58	16.7	43	27.4	23	14.5	66	20.9	124	18.7
62	5	4.1	5	4.2	6	5.6	16	4.6	12	7.6	11	6.9	23	7.3	39	5.9
63	6	4.9	5	4.2	6	5.6	17	4.9	12	7.6	15	9.4	27	8.5	44	6.6
64	7	5.7	9	7.6	6	5.6	22	6.3	18	11.5	23	14.5	41	13.0	63	9.5
65	2	1.6	1	0.9	5	4.7	8	2.3	10	6.4	8	5.0	18	5.7	26	3.9
66	4	3.3	6	5.1	5	4.7	15	4.3	11	7.0	9	5.7	20	6.3	35	5.3
67	6	4.9	5	4.2	7	6.5	18	5.2	12	7.6	11	6.9	23	7.3	41	6.2
68	3	2.5	4	3.4	5	4.7	12	3.5	8	5.1	7	4.4	15	4.8	27	4.1

I　　「百人一首」各歌毎の正答生徒数と百分率 ③

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
69	6	4.9	6	5.1	8	7.5	20	5.8	12	7.6	26	16.4	38	12.0	58	8.8
70	5	4.1	4	3.4	9	8.4	18	5.2	16	10.2	16	10.1	32	10.1	50	7.5
71	3	2.5	2	1.7	3	2.8	8	2.3	8	5.1	3	1.9	11	3.5	19	2.9
72	1	0.8	1	0.9	1	0.9	3	0.9	7	4.5	8	5.0	15	4.8	18	2.7
73	8	6.6	3	2.5	4	3.7	15	4.3	10	6.4	8	5.0	18	5.7	33	5.0
74	1	0.8	2	1.7	6	5.6	9	2.6	6	3.8	5	3.1	11	3.5	20	3.0
75	4	3.3	5	4.2	3	2.8	12	3.5	10	6.4	4	2.5	14	4.4	26	3.9
76	5	4.1	4	3.4	6	5.6	15	4.3	9	5.7	7	4.4	16	5.1	31	4.7
77	6	4.9	3	2.5	7	6.5	16	4.6	13	8.3	21	13.2	34	10.8	50	7.5
78	5	4.1	10	8.5	12	11.2	27	7.8	23	14.6	19	11.9	42	13.3	69	10.4
79	8	6.6	11	9.3	10	9.4	29	8.4	20	12.7	21	13.2	41	13.0	70	10.6
80	3	2.5	3	2.5	8	7.5	14	4.0	9	5.7	6	3.8	15	4.8	29	4.4
81	8	6.6	3	2.5	11	10.3	22	6.3	22	14.0	15	9.4	37	11.7	59	8.9
82	1	0.8	2	1.7	5	4.7	8	2.3	11	7.0	7	4.4	18	5.7	26	3.9
83	3	2.5	3	2.5	4	3.7	10	2.9	9	5.7	2	1.3	11	3.5	21	3.2
84	6	4.9	3	2.5	5	4.7	14	4.0	11	7.0	11	6.9	22	7.0	36	5.4
85	4	3.3	2	1.7	5	4.7	11	3.2	10	6.4	4	2.5	14	4.4	25	3.8
86	5	4.1	4	3.4	5	4.7	14	4.0	12	7.6	5	3.1	17	5.4	31	4.7
87	7	5.7	7	5.9	10	9.4	24	6.9	13	8.3	10	6.3	23	7.3	47	7.1
88	4	3.3	0	0	5	4.7	9	2.6	7	4.5	2	1.3	9	2.9	18	2.7
89	3	2.5	1	0.9	3	2.8	7	2.0	13	8.3	4	2.5	17	5.4	24	3.6
90	2	1.6	2	1.7	4	3.7	8	2.3	10	6.4	9	5.7	19	6.0	27	4.1
91	4	3.3	2	1.7	5	4.7	11	3.2	7	4.5	4	2.5	11	3.5	22	3.3
92	5	4.1	3	2.5	5	4.7	13	3.8	9	5.7	3	1.9	12	3.8	25	3.8
93	2	1.6	4	3.4	4	3.7	10	2.9	11	7.0	7	4.4	18	5.7	28	4.2
94	3	2.5	2	1.7	5	4.7	10	2.9	8	5.1	3	1.9	11	3.5	21	3.2
95	2	1.6	2	1.7	4	3.7	8	2.3	7	4.5	5	3.1	12	3.8	20	3.0
96	1	0.8	1	0.9	2	1.9	4	1.2	7	4.5	4	2.5	11	3.5	15	2.3
97	4	3.3	3	2.5	4	3.7	11	3.2	8	5.1	7	4.4	15	4.8	26	3.9
98	4	3.3	5	4.2	5	4.7	14	4.0	9	5.7	3	1.9	12	3.8	26	3.9
99	4	3.3	3	2.5	4	3.7	11	3.2	7	4.5	6	3.8	13	4.1	24	3.6
100	5	4.1	4	3.4	7	6.5	16	4.6	8	5.1	11	6.9	19	6.0	35	5.3

Ⅱ

「百人一首」正解歌数による生徒数と百分率累計 ①

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
0	34	27.9	31	26.3	19	17.8	84	24.2	35	22.3	16	10.1	51	16.1	135	20.4
1	27	50.0	26	48.3	20	36.5	73	45.2	25	38.2	8	15.1	33	26.5	106	36.4
2	11	59.0	17	62.7	13	48.6	41	57.0	20	50.9	15	24.5	35	37.6	76	47.9
3	13	69.7	7	68.6	12	59.8	32	66.2	19	63.0	16	34.6	35	48.7	67	58.0
4	8	76.3	6	73.7	8	67.3	22	72.5	10	69.4	13	42.8	23	56.0	45	64.8
5	1	77.1	3	76.2	6	72.9	10	75.4	3	71.3	8	47.8	11	59.5	21	68.0
6	4	80.4	3	78.7	4	76.6	11	78.6	1	71.9	15	57.2	16	64.6	27	72.1
7	3	82.9	3	81.2	3	79.4	9	81.2	6	75.7	6	61.0	12	68.4	21	75.3
8	3	85.4	4	84.6	2	81.3	9	83.8		75.7	3	62.9	3	69.4	12	77.1
9		85.4		84.6	3	84.1	3	84.7	1	76.3	4	65.4	5	71.0	8	78.3
10	3	87.9	1	85.5	2	86.0	6	86.4	2	77.6	7	69.8	9	73.9	15	80.6
11	2	89.5	2	87.2		86.0	4	87.6	2	78.9	1	70.4	3	74.9	7	81.7
12	1	90.3	1	88.1		86.0	2	88.2	2	80.2	1	71.0	3	75.9	5	82.5
13	1	91.1	2	89.8		86.0	3	89.1	4	82.8	6	74.8	10	79.1	13	84.5
14	1	91.9		89.8		86.0	1	89.4	2	84.1	2	76.1	4	80.4	5	85.3
15	1	92.7		89.8	1	86.9	2	90.0		84.1		76.1	0	80.4	2	85.6
16		92.7		89.8		86.9	0	90.0	1	84.7	3	78.0	4	81.7	4	86.2
17	1	93.5		89.8	1	87.8	2	90.6	2	86.0	3	79.9	5	83.3	7	87.3
18		93.5	1	90.7		87.8	1	90.9	2	87.3	3	81.8	5	84.9	6	88.2
19		93.5	1	91.6	1	88.7	2	91.5	1	87.9	1	82.4	2	85.5	4	88.8
20		93.5	2	93.3	1	89.6	3	92.4		87.9		82.4	0	85.5	3	89.3
21		93.5		93.3		89.6	0	92.4		87.9		82.4	0	85.5	0	89.3
22		93.5		93.3	1	90.5	1	92.7	2	89.2	3	84.3	5	87.1	6	90.2
23	1	94.3	2	95.0		90.5	3	93.6		89.2		84.3	0	87.1	3	90.7
24		94.3		95.0		90.5	0	93.6		89.2		84.3	0	87.1	0	90.7
25		94.3		95.0	1	91.4	1	93.9		89.2	2	85.6	2	87.7	3	91.2
26		94.3	1	95.9	1	92.3	2	94.5		89.2		85.6	0	87.7	2	91.5
27		94.3		95.9		92.3	0	94.5		89.2	1	86.2	1	88.0	1	91.7
28		94.3		95.9		92.3	0	94.5		89.2		86.2	0	88.0	0	91.7
29		94.3		95.9		92.3	0	94.5		89.2	1	86.8	1	88.3	1	91.9
30		94.3		95.9		92.3	0	94.5	1	89.8	1	87.4	2	88.9	2	92.2
31		94.3		95.9		92.3	0	94.5		89.8	1	88.0	1	89.2	1	92.4
32		94.3		95.9		92.3	0	94.5		89.8		88.0	0	89.2	0	92.4
33		94.3		95.9		92.3	0	94.5	1	90.4		88.0	1	89.5	1	92.6

↑
生徒の正解歌数

Ⅱ

「百人一首」正解歌数による生徒数と百分率累計 ②

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
34		94.3		95.9		92.3	0	94.5		90.4		88.0	0	89.5	0	92.6
35		94.3		95.9		92.3	0	94.5		90.4		88.0	0	89.5	0	92.6
36		94.3	1	96.8		92.3	1	94.8		90.4		88.0	0	89.5	1	92.8
37		94.3		96.8		92.3	0	94.8	1	91.0	1	88.6	2	90.1	2	93.1
38	2	95.9		96.8		92.3	2	95.4		91.0		88.6	0	90.1	2	93.4
39		95.9		96.8		92.3	0	95.4		91.0		88.6	0	90.1	0	93.4
40		95.9		96.8		92.3	0	95.4		91.0	1	89.2	1	90.4	1	93.6
41		95.9		96.8		92.3	0	95.4		91.0	2	90.5	2	91.0	2	93.9
42		95.9		96.8		92.3	0	95.4		91.0		90.5	0	91.0	0	93.9
43		95.9		96.8		92.3	0	95.4		91.0	1	91.1	1	91.3	1	94.1
44		95.9		96.8	1	93.2	1	95.7	1	91.6	1	91.7	2	91.9	3	94.6
45		95.9	1	97.7		93.2	1	96.0		91.6		91.7	0	91.9	1	94.8
46	1	96.7		97.7		93.2	1	96.3		91.6		91.7	0	91.9	1	95.0
47		96.7		97.7		93.2	0	96.3		91.6		91.7	0	91.9	0	95.0
48		96.7		97.7		93.2	0	96.3	1	92.2		91.7	1	92.2	1	95.2
49		96.7		97.7		93.2	0	96.3	1	92.8		91.7	1	92.5	1	95.4
50		96.7		97.7		93.2	0	96.3		92.8	1	92.3	1	92.8	1	95.6
51		96.7		97.7	1	94.1	1	96.6		92.8		92.3	0	92.8	1	95.8
52		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8		92.3	0	92.8	0	95.8
53		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8		92.3	0	92.8	0	95.8
54		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8		92.3	0	92.8	0	95.8
55		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8	1	92.9	1	93.1	1	96.0
56		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8	3	94.8	3	94.1	3	96.5
57		96.7		97.7		94.1	0	96.6		92.8	3	96.7	3	95.1	3	97.0
58		96.7		97.7	1	95.0	1	96.9		92.8		96.7	0	95.1	1	97.2
59		96.7	1	98.6	1	95.9	2	97.5	1	93.4		96.7	1	95.4	3	97.7
60		96.7		98.6		95.9	0	97.5		93.4		96.7	0	95.4	0	97.7
61	1	97.5		98.6		95.9	1	97.8		93.4	1	97.3	1	95.7	2	98.0
62		97.5		98.6		95.9	0	97.8		93.4		97.3	0	95.7	0	98.0
63		97.5		98.6		95.9	0	97.8		93.4		97.3	0	95.7	0	98.0
64		97.5	1	99.5		95.9	1	98.1	2	94.7		97.3	2	96.3	3	98.5
65		97.5		99.5		95.9	0	98.1		94.7		97.3	0	96.3	0	98.5
66		97.5		99.5		95.9	0	98.1		94.7		97.3	0	96.3	0	98.5
67		97.5		99.5		95.9	0	98.1		94.7		97.3	0	96.3	0	98.5

Ⅱ

「百人一首」正解歌数による生徒数と百分率累計 ③

	中1	%	中2	%	中3	%	中計	中%	高1	%	高2	%	高計	高%	全計	全%
	122		118		107		347		157		159		316		663	
68		97.5		99.5		95.9	0	98.1		94.7		97.3	0	96.3	0	98.5
69		97.5		99.5		95.9	0	98.1		94.7		97.3	0	96.3	0	98.5
70		97.5		99.5	1	96.8	1	98.4		94.7		97.3	0	96.3	1	98.7
71		97.5	1	100		96.8	1	98.7		94.7	1	97.9	1	96.6	2	99.0
72		97.5		100		96.8	0	98.7		94.7		97.9	0	96.6	0	99.0
73		97.5		100		96.8	0	98.7		94.7		97.9	0	96.6	0	99.0
74		97.5		100		96.8	0	98.7		94.7		97.9	0	96.6	0	99.0
75		97.5		100		96.8	0	98.7		94.7		97.9	0	96.6	0	99.0
76	1	98.3		100		96.8	1	99.0		94.7		97.9	0	96.6	1	99.2
77		98.3		100		96.8	0	99.0		94.7	1	98.5	1	96.9	1	99.4
78		98.3		100		96.8	0	99.0		94.7		98.5	0	96.9	0	99.4
79		98.3		100		96.8	0	99.0		94.7		98.5	0	96.9	0	99.4
80		98.3		100		96.8	0	99.0		94.7		98.5	0	96.9	0	99.4
81		98.3		100		96.8	0	99.0		94.7		98.5	0	96.9	0	99.4
82		98.3		100		96.8	0	99.0	1	95.3		98.5	1	97.2	1	99.6
83		98.3		100		96.8	0	99.0		95.3		98.5	0	97.2	0	99.6
84		98.3		100		96.8	0	99.0		95.3		98.5	0	97.2	0	99.6
85		98.3		100		96.8	0	99.0	1	95.9		98.5	1	97.5	1	99.8
86		98.3		100	1	97.7	1	99.3		95.9	1	99.1	1	97.8	2	100
87	1	99.1		100		97.7	1	99.6		95.9		99.1	0	97.8	1	100
88	1	99.9		100		97.7	1	99.9		95.9		99.1	0	97.8	1	100
89		99.9		100		97.7	0	99.9		95.9		99.1	0	97.8	0	100
90		99.9		100	1	98.6	1	100	1	96.5		99.1	1	98.1	2	100
91		99.9		100		98.6	0	100	1	97.1		99.1	1	98.4	1	100
92		99.9		100		98.6	0	100		97.1		99.1	0	98.4	0	100
93		99.9		100		98.6	0	100	1	97.7		99.1	1	98.7	1	100
94		99.9		100		98.6	0	100		97.7		99.1	0	98.7	0	100
95		99.9		100		98.6	0	100	2	99.0		99.1	2	99.3	2	100
96		99.9		100		98.6	0	100		99.0		99.1	0	99.3	0	100
97		99.9		100		98.6	0	100		99.0		99.1	0	99.3	0	100
98		99.9		100		98.6	0	100		99.0		99.1	0	99.3	0	100
99		99.9		100		98.6	0	100		99.0		99.1	0	99.3	0	100
100		99.9		100	1	99.5	1	100	1	99.6	1	99.7	2	99.9	3	100

ためか他学年よりやや高くなっている。）

次に『百人一首』自体の正答の状態から考えてみる。

『百人一首』の覚え方は，ほとんどの場合が，①「秋の田の」の歌から，⑩⓪「ももしきや」の歌までを，順次暗記するようである。とにかく，覚えておきさえすればいつか役立つのだからという漠然とした理由で，ひたすらに覚えるような方法で，はたして生徒に『百人一首』が受け容れられているものなのだろうか。また，わざわざ覚えたその知識は，どの程度，時が経っても定着しているものなのだろうか。そんな疑問を，この調査のデータは物語っているように思う。

まず，生徒の覚えている率の高い歌を1～10位まで見てみることにする。

1位　57.6%　⑦　阿部仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

2位　41.2%　②　持統天皇

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

3位　38.9%　㉝　紀　友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

4位　32.7%　⑨　小野小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に

5位　29.4%　④　山部赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

6位　28.1%　⑤　猿丸大夫

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

7位　25.3%　①　天智天皇

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ

8位　23.7%　③　柿本人麻呂

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

9位　21.3%　⑰　在原業平

ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

10位　20.7%　㊵　小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

以上が，中・高あわせて全体の生徒がよく覚えていた歌の1～10位までである。上位10位までに，①・②・③・④・⑤・⑦・⑨の7首までが，①～⑩までの歌で占められている点に注目すべきであろう。『百人一首』を覚えてゆく場合，当然のことながら，①「秋の田の」の歌から始まって順次暗記してゆくのが一般的な傾向であろうが，そのことが，このデータからも窺い知ることができる。また，一方で，覚えたことがあるとする，全体の26.2%に相当する生徒の暗記の在り方が，果してどの程度全体を網羅したものであったのかという疑問も生じてくる。「須磨源氏」

という言い方もあるけれども，それと相通ずるものが，『百人一首』にも見られるのではないだろうか。仮りに「覚えた」と言ってはいるものの，実際のところは，①～⑩辺りまでを覚えたに過ぎないのではないだろうか。⑩の歌を過ぎると，定着率が，かなり低い水準となっていることからも，判かると思う。もしも，①～⑩⓪の歌をまんべんなく覚えていったとするならば，このような極端な片寄りは見られないはずである。

一見して，『百人一首』を覚えたことがある生徒が，全体の約3割近くいるというデータを目の前にした時，教師の側としては，ついその知識が生徒に内在していると思いがちであるが，実態は，約4割程度の生徒が1～3首位覚えているだけで，全体の約1割程度の生徒にしか定着していないことに気付いておくべきであろう。『百人一首』の定着率が一般的に10首程度どまりであることは，次のような愛知教育大附属高校の調査結果（研究紀要第20号「古典教材をどのような観点から選ぶか」1993. 3）からも分かる。

100首全ておぼえている	0％
50首以上おぼえている	2.5％
10首以上おぼえている	20.9％
1，2首はおぼえている	50.2％

すなわち約2割の生徒が約10首程度知っているというのが「百人一首」の生徒の知識の実態なのである。そして本校調査によれば，約2割の生徒には全く定着していないのである。

⑩の歌以降にあっても，定着率の高い歌を見てみると，

⑮　16.7％　光孝天皇

君がため春の野に出てて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ

⑰　21.3％　在原業平

ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

㉝　38.9％　紀　友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

52　13.9％　藤原道信

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな

60　20.7％　小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

61　18.7％　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜今日九重ににほひぬるかな

以上の中でも，中1から高2にかけて，よく定着しているのは，61である。この傾向は，冒頭①～⑤を除いては，⑦・⑨・⑮・⑰などに見られるが，後半部の61という歌で見られるのは注目すべきである。61にこうした各学年を通じての定着の高さがある原因は，⑦の「天の原の」の歌に通じると思われる。⑦の歌が，全体として57.6％，中1でも65.6％の高さを誇っている原因は

何なのか。それは，小学校の社会科の授業で習ったことによるようである。生徒の反応も，この歌については，「社会で習ったから知っている」とする者が多かった。㉛の歌も同様で，平城京の繁栄を学ぶ際に，よく引用され，その結果定着しているようである。また，その他にも，②の歌が学校図書の小学6年生の，現行の教科書に，「短歌」の領域に関連して取られているように，③・㉝の歌も生徒が習った時期の小学校の教科書を通して覚えている場合もあるようである。

単なる棒暗記よりも，その歌の持つ時代背景や，作者についての知識を持った上で，自然と頭に入ったものの方が，忘れにくいということは当然のことかも知れないが，特に「百人一首」では，そのことが，かなり明確に出てきているように思う。㊿の小式部内侍の歌が，高2で53.5％という定着がみられるのも，彼らが中学3年生の時に，『十訓抄』のこの歌にまつわる説話を授業で扱ったことに原因するといえよう。また，㉝「ひさかたの」の歌が，高2で61.6％となっているのも，現在推量・原因推量の「らむ」を指導する際に，この歌を用例にしたことに拠ると思われる。⑰「ちはやぶる」の歌も，『伊勢物語』の「風ふけば」の歌を学習する際，業平と竜田山と関連して学習させたため，32.1％というデータが出たのだと思う。

このように見てくると，『百人一首』についての常識というものは意外と低く，しかも，ただの丸暗記での覚え方については，その定着率から見ても甚だ疑問が残ると言わざるを得ない。また「物語」を付随してやる方が覚えやすいということも言えよう。『百人一首一夕話』とまではゆかなくとも，それぞれの歌の作者についてだけでも説明してやるだけで，その歌を記憶に残す率はかなり上がってくるといえるのではないだろうか。その意味からも，単に①〜⑩⓪という順にこだわることなく，より幅を持たせた配置を教師の側から試みてみる必要性もあろうかと思う。

3．試行的授業の実践報告

予備調査の結果を踏まえ，中・高6ヶ年の古典教材の編成を考えていくため，現在，各学年毎に，様々な古典授業の試みを行っている。その一端は，1992年度本校教育研究会の公開授業において示した。以下は，その公開授業の報告である。

〔中学　－御伽草子「浦島太郎」－〕

（日時）　1992年11月20日（金）　第1校時

（授業者）　須藤敬

（授業クラス）　中学2年B組　男子40名

（研究テーマ）　中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

（教材）　御伽草子『浦島太郎』（本文は小学館古典全集）

（教材設定の理由）

予備調査の結果が示すように，現在，古典は生徒の日常生活からますます離れたものになろうとしている。そうした状況の中，古典学習導入期の適切なる教材を探る試みの1つとして設定し

た。理由は以下の通りである。

まず第1に親しみ易さという点。生徒の誰もが知っている話であるので，生徒はテクストの先回りができる。そのため古典を読むことの心理的抵抗感を少なくし，興味を喚起しやすくなるのではないか。一方，知っているつもりだった話が，実際に読んでみると，自分の持っている知識とは随分違ったものであることに気付く。また御伽草子特有の表現の類型性やさし絵があることも，古典の導入教材としては適切と考えられる。こうした平易さ，親しみやすさと話の意外性が，1つの作品を読み通す原動力となるのではないだろうか。現行の中学校国語教科書の古典教材を見ると，平易さという点に気遣うあまり，生徒が粘り強く古典に立ち向かっていくには，文章が短かく，内容的にももの足りなさを感じる。

教材設定の理由の第2点はこの内容に関わることである。即ち，浦島伝承を古代から現代まで幅広く扱うことで，1つの話の素材が，時代毎にいかなる発想や表現で捉えられていたかを考えさせることができる。そのことによって文学作品をダイナミックに捉える視野，豊かな発想力，感性を養うことができるのではないだろうか。「文章の平易さ→内容の浅さ」とならないよう注意することが必要である。江藤淳と蓮実重彦がその対談集（『オールド・ファッション』中央公論社）で次のように述べていることが参考になる。日本の英語教育はその導入において，構文の易しさがそのまま例文の内容の浅さにつながっている。たとえば「A is B」という構文は大切である。しかし，AにThisが入り，Bにa penが入っては，物事がかなりわかり始めている中学生にはあまりにもの足りない。AにLoveを入れ，Bに入るべき語句を考えさせ，それを英語で何というかを教えれば，その趣きはかなり違ってくるであろう。この指摘は古典教材のあり方にもそのままあてはめることができるであろう。表現はやさしくても，内容は深いもの，この条件に御伽草子は堪えられるのではないだろうか。そして1つの作品を省略なしに粘り強く読み通す手ごたえを中学時に得ておくことは高校の古典学習へつなげる上でも重要なことであろう。

（授業展開　全12時間）

第1時　「浦島太郎」予備調査

アンケート形式で実施。浦島太郎の内容に関わるいくつか点について問うことで，実は，浦島太郎の話の詳細は何も知らなかったことを気付かせる。

第2時　明治～昭和の教科書の「浦島太郎」－補助資料（一）～（四）

『教科書大系』所収の尋常小学読本の「浦島太郎」を紹介。現在，自分たちの知っている「浦島太郎」の話の基本形がここにあることを確認させる。またその中でも話に異同があることを見る。たとえば，なぜ浦島太郎は龍宮城から故郷へ帰る気になったのか。明治43年第2期国定教科書では「ウマイ　ゴチソウ　モ　毎日　タベル　ト　シマヒ　ニハ　イヤ　ニ　ナリマス。オモシロイ　アソビ　モ　毎日　見ル　ト　シマヒ　ニハ　アキテ　キマス」とあるが，昭和8年第4期国定教科書では「おとうさん　や　おかあさん　の　ことを　かんがえる　と　家　へ　かへりたく　なりました」となる。こ

うした異同を背後でなした主体は何か。これを考えることは，これからの授業展開を前に，ほどよいトレーニングとなる。また中世から近代にかけて，「浦島太郎」の話の何が失われ，何が付加されたのを考えるきっかけともなる。このことは「一寸法師」でも応用がきく。「一寸法師」はなぜ都に上ることになったのか。御伽草子の形と，近代以降の形を示して考えさせるのもおもしろい。

第３時　『日本書紀』『万葉集』の浦島伝承－補助資料（五）

古代の文献を用いることで浦島伝承の時空の広がり，深さを知らせる。

第４時　太宰治『御伽草子』「浦島さん」

第５時　太宰治『御伽草子』「浦島さん」

プリントで配布。短編とはいえ，授業で扱うにはやや分量が多いので，自宅で読むことを基本とし，教室では，１人の近代作家が浦島伝承のどういった点に興味を持ち，いかに想像力豊かに読んだのかを整理した。このことは生徒自身がこれから想像力豊かに御伽草子「浦島太郎」を読むことを促すことになると考える。

第６時　御伽草子のさし絵

さし絵を読むという要素を授業に取り込むことで，テクスト読解をより深めようとするものである。近年，絵画資料の読み込み，及びそれらと文学テクストとの関わりについては，飛躍的に研究が進んでおり，その成果を利用させていただいた。今回は主に黒田日出男氏「御伽草子の絵画コード論」（『御伽草子』ぺりかん社，1990年）の御論を中心に授業を構成した。

以上の作業の後，いよいよ御伽草子「浦島太郎」の読解に入る。

第７時　御伽草子「浦島太郎」プリント（一）のＬ10まで－物語の発端－

第８時　御伽草子「浦島太郎」プリント（二）のＬ32まで－龍宮城に着くまで－

第９時　〈本時〉御伽草子「浦島太郎」プリント（三）のＬ14まで－四方四季の描写－

第10時　御伽草子「浦島太郎」プリント（四）のＬ12まで－乙姫との別れ－

第11時　御伽草子「浦島太郎」プリント（五）のＬ23まで－玉手箱をあけるまで－

第12時　御伽草子「浦島太郎」プリント（六）の終わりまで－物語の結末－

（本時の計画）

Ａ．目標

①　四方四季の描写から日本人の季節感（和歌的発想）を考えさせる。

②　龍宮城の描写を手がかりに，理想郷（異郷）について考えさせる。

Ｂ．展開

①　本文朗読

七五調のリズムに気付くよう，読点に注意させる。

②　内容把握

(a)四季の景物の確認

「梅・桜・柳・霞・鶯」「卯の花・蓮・蝉・夕立・時鳥」「紅葉・白菊・真萩・鹿」「枯葉・霜・雪・炭竈の煙」等の語に着目させ，それぞれが各季節を代表する景物であることを確認させる。資料集として持たせている『国語の資料三訂版』（正進社）の巻頭グラビア「四季の詩歌」の写真を適宜用いる。

(b)七五調・和歌的修辞・和歌的発想

詞章の構成の仕方が伝統的な和歌の教養をふまえていることを確認する。ここでも『国語の資料』の「古今集・新古今集」の項にのる和歌を実例として示していく。そして，龍宮城という1つの理想郷の具体的イメージが，和歌という伝統的美意識を基盤にしていることを押さえる。

③　語彙・文法

(a)「おぼゆ」

自発の古語表現であることを確認する。1学期に説明的文章兼文法教材として用いた，板坂元『日本人の論理構造』の中の1編「れる・られる」の内容を想起させる。

(b)「ま（萩）」

接頭語「ま」の概念規定を他の用例（「ま心・ま人間・ま水・ま東・ま四角・まいわし・ま鴨」等）を答えさせることで確認していく。

(c)「（もの）すごし」

いわゆる古今異義語の学習。原義から現在の用いられ方まで，意味の変遷を指摘する。

④　四方四季の描写について

龍宮城のすばらしさが，四方四季という点にあることの意味を考えさせる。まず第1時で実施した「浦島太郎予備調査アンケート」の結果を示す。問4「龍宮城はどういう点がすばらしいのですか」という問いの結果は次の通りであった。

（調査生徒数120名）

○おいしい料理が食べられる。	60人
○乙姫様がいる。美人がいる。	46人
○魚が歓迎してくれる。たいやひらめの舞い踊りが見られる。	37人
○働かなくても自由に遊んで暮らしていられる。	25人
○美しい建物，美しい土地。	17人
○時間がない，年をとらない。	10人
○四方四季。	5人

現在の（男子）中学生にとって理想郷のイメージを支えるものが「おいしい料理」か「美人」である点に，何かしらもの寂しさを感じるが，一方，わずかではあるが「不老不死」「四方四季」を答えている生徒がいる点は見逃せない。

理想郷の１つの型としての四方四季と不老不死とがどのように関わり合うのかを考えさせるのが，本時最後の作業である。

まず，日本・中国の歴代帝王の何人かが不老不死の薬を求めた話を紹介し，いかなる財力・権力をもってしても手に入らない，最後の欲望の対象としての時間というものを認識させる。同時に四方四季が理想郷の１つの型として形成されてくることを説明する（『源氏物語』の六条院，『酒呑童子』の館等）。そして四方四季は季節の循環がないこと，即ち時間の流れのない無時間の世界であることを気付かせる。また第３時で扱った『万葉集』の浦島伝承には「常世」とあり，それは「老いもせず　死にもせずして」と説明されていたことを再指摘し，永遠に現在の状態が続くということは時間の停止を意味することを確認させる。つまり四方四季と不老不死とは時間の流れの停止という点において本質的に同じであることを理解させ，それはまた無常観の裏返しの表現であることを今後の課題として考えさせる。

（今回の試みについての検討）

公開授業の後，参観していただいた先生方（約50名）と研究協議会を行った。以下，そこでの質問・意見を踏まえ，今回の授業案に対する検討とまとめをしておきたい。

指摘をうけた最大の問題点は中学２年生を対象に１単元12時間をあて，しかも様々な内容を盛込んでの授業は，生徒が消化しきれるものかどうかということであった。確かに授業に過剰な内容を期待することは控えねばならないが，生徒に刺激を与えるという点では，考えうる限りの様々な角度からのアプローチは試みられてよいはずである。またすべてをこの１単元で処理しようとせず，１年間，あるいは中学３年間の中で，他の教材との関連をより密接にすることで，先にあげた問題点はかなり回避できるのではないだろうか。既に述べたように，「おぼゆ」という語を突然教えようとしてもそれはただ知識を与えたにとどまってしまうだろうが，その前に自発表現についての文法学習をしたり，さらには自発表現から日本人の特性を考えるような評論を読んでおけば，その理解は一層深まるはずである。また接頭語「ま」を教える場合，言葉の意味を教えるという発想では，生徒に説明をすることは無理がある。ここで大切なのは言葉の定義である。このことも，他の教材，現代文の読解時において先に触れることができるし，そうしたことを問題にした評論を読ませることも一方で必要であろう。当該学年では夏休みの課題として鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波新書）を与え，ことばの意味と定義の問題を事前に考える機会を用意しておいた。こうしたことは和歌的発想，四方四季，不老不死といった内容についても言えることである。「浦島太郎」だけでこれらをすべて教えようとすることは土台，無理である。散文とは別に韻文を一方の柱に立て，中学３年間で扱っていくことが考えられねばならないし，「常・無常」といった日本人の心性については，たとえば『竹取物語』の最後において不老不死の薬を富士山で焼かせる場面や『平家物語』と組み合わせたり，和歌でも述懐歌を扱ったりということが必要になろう。

教材同士が互いに切れているのではなく，様々なレベルで有機的にかみ合うような教材編成を編み出すことが今，一番重要なことではないだろうか。

古典教育の重要な要素は，古典作品の持つダイナミズムを教えることにあるのではないだろうか。生徒たちにとって，今の自分に，どこか原理的・本質的に関わってくる部分がなければ，今後，古典教育はただの教養主義にとり込まれてしまうことになるだろう。以上のような問題意識からあえて今回のような授業案を設定してみたわけだが，これを中・高６ヶ年の教材編成までに拡大していくことがこれからの課題である。

中学古文　『浦島太郎』予備調査

組　番　氏名

次の各項目について、知っていることを書きなさい。

① 浦島太郎とはどういう人ですか。（住んでいる場所、家庭環境、年齢等）

② なぜ龍宮城に行くことになったのですか。

③ 龍宮城はどういう点がすばらしいのですか。

④ なぜ龍宮城から帰ってきたのですか。

⑤ 玉手箱を開けた後、浦島太郎はどうなったのですか。

⑥ 『浦島太郎』の話の結末はどのようなものですか。

⑦ 「玉手箱」の持つ意味は何か、考えをまとめなさい。

⑧ 『浦島太郎』の主題は何か、考えをまとめなさい。

中学二年　国語「浦島太郎」補助資料（一）

1　明治三十三年発行

尋常 國語讀本　巻三

目次

第一課　春 の の
第二課　ちょー
第三課　金太郎
第四課　ツヾキ
第五課　あさ日
第六課　耳 の まね
第七課　ワガ家
第八課　太郎 ノ 家
第九課　竹の子 の うりかひ
第十課　りょーり の まね
第十一課　田ウエ
第十二課　牛馬
第十三課　馬 の はなし
第十四課　池
第十五課　海
第十六課　浦島太郎
第十七課　とんぼ
第十八課　いぬ
第十九課　友 を えらべ
第二十課　新井白石

第十六課　浦島太郎

海ニハ、魚ノ外ニ、カメモスンデヰマス。
昔々浦島太郎トイフリョーシガ、ハマベヲトホリマシタトコロガ、イタヅラザカリノ子供ガ、大キイカメヲトラヘテ、サンザンニ、苦シメテヰマシタ。
浦島ハ、ナサケブカイ男デアッタカラ、之ヲ見カネテ、「ソンナムゴイコトヲスルモノデハナイ、早クニガシテヤレ。」ト、子供ニイヒキカセマシタガ、子供ハ、ナカナカキヽイレマセヌ。
ソコデ、浦島ハ、フトコロニ持ッテヰタ錢ヲ、子供ニヤリ、カメヲモラヒウケテ、其ノコーラヲナデナガラ、「ヤレヤレカハユサウナコトヲシタ、サア、ニガシテヤルゾ。」トイッテ、カメヲ海ニハナシテヤリマシタ。
カメハ、ウレシサウニ、水ソコニ入リマシタガ、其ノノチ浦島ヲ、リューグートイフ、メヅラシイトコロヘ、ツレテユキマシテ、オンガヘシヲシタトイフコトデアリマス。

2　明治三十六年発行（第一期国定国語教科書）

高等小學讀本二

目録

第一課　秋の野山
第二課　椰子の散布
第三課　イチョー
第四課　阿倍仲麻呂
第五課　助船
第六課　海ノ話
第七課　浦島子
第八課　紫式部
第九課　役所敎子
第十課　名古屋城
第十一課　わが領土
第十二課　聯隊旗
第十三課　廢物利用
第十四課　製紙
第十五課　鵯越
第十六課　一谷の戰（一）
第十七課　一谷の戰（二）
第十八課　アイヌ
第十九課　二人の旅人と熊
第二十課　笠置落

第七課　浦島子。

春の日かげののどかにて、
波しづかなるよさの海。
海上、遠く、船出して、
島子のつりをなせるとき、
波の中より、一匹の
大亀出でしが、たちまちに、
化して、をとめとなりにけり。
をとめ、しづかに、いへるよー、
「われ、今、君をみちびきて、
蓬萊宮に、いたるべし。
いざ。いざ。早う。」といふままに、
島子は、あとに、從ひて、
行くや、千尋の海の底。
五百重の波をかきわけて、
蓬萊宮にいたりけり。」
あやの衣を身にかされ、
あまたのものにかしづかれ、
玉のうてなに、浦島子、
長き月日を送りしが、
おのが故鄕の、なにとなく、
こひしきままに、「いま一度、
歸らんもの。」と、そのよしを、
をとめに、いへば、泣く泣くも、
また、あふまでのしるしにと、
取りて渡せり。玉手箱。」
島子、故鄕に、歸り來て、
見れども、おのが家見えず、
さがせど、おのが父母あらず。
せんかたなくて、その箱の
ふたをあくれば、あやしやな、
白煙、中より、たちのぼり、
かなたに、なびくと、見るうちに、
若きすがたは消えうせて、
しらがの翁となりにけり。」

中学二年　国語「浦島太郎」補助資料（二）

3　明治四十三年発行（第二期国定国語教科書）

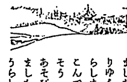
尋常小學讀本　巻三

ムカシ ウラシマ太郎 トイフ 人 ガ アリマシタ。
アル 日 ウミベ ヘ 出テ 見ル ト、子ドモ ガ 大ゼイ デ カメ ヲ ツカマヘテ、オモチャ ニ シテ ヰマス。ウラシマ ハ カハイサウ ニ 思ッテ、子ドモ カラ ソノ カメ ヲ 買ッテ、ウミ ヘ ハナシテ ヤリマシタ。
ソレ カラ 二三日 タッテ、ウラシマ ガ ウミベ デ ツリ ヲ シテ ヰル ト、大キナ カメ ガ 出テ キテ、
「ウラシマ サン、コノ アヒダ ハ アリガタウ ゴザイマシタ。オレイ ニ リユウグウ ヘ ツレテ 行ッテ アゲマセウ。私 ノ セナカ ヘ オノリ ナサイ。」
ト イヒマス。
ウラシマ ガ ヨロコンデ、カメ ニ ノル ト、グングン ウミ ノ 中 ヘ シヅンデ 行ッテ、マモナク リユウグウ ノ 門 ヘ ツキマシタ。
リユウグウ ニハ オトヒメ ト イフ キレイナ オヒメサマ ガ ヰテ、ウラシマ ノ 來タ ノ ヲ タイソウ ヨロコンデ、イロイロナ ゴチソウ ヲ シタリ、サマザマ ノ アソビ ヲ シテ 見セマシタ。
ウラシマ ハ オモシロクテ タマリマセン カラ、リユウグウ ノ オホヤクサマ ニ ナッテ、ウチ ヘ カヘル ノ モ ワスレテ ヰマシタ。

4　大正七年発行（第三期国定国語教科書）

尋常小學 國語讀本　巻三

むかし うらしま太郎 と いふ 人 が ありました。
ある 日 はま を 通る と、子ども が 大ぜい で かめ を つかまへて、おもちゃ に して ゐます。うらしま は かはい さう に おもつて、子ども から その かめ を かつて、海 へ はなして やりました。
それ から 二三日 たつて、うらしま が 舟 に のつて つり を して ゐます と、大きな かめ が 出て きて、
「うらしま さん、この あひだ は ありがたう ございました。その おれい に りゆうぐう へ つれて いつて 上げませう。私 の せ中 へ おのり なさい。」
と いひました。うらしま が よろこんで かめ に のる と、かめ は だんだん 海 の 中 へ はいつて いつて、まもなく りゆうぐう へ つきました。
りゆうぐう の おとひめ は うらしま の きた の を よろこんで、毎日 いろいろな ごちそう を したり、さまざまな あそび を して 見せたり しました。



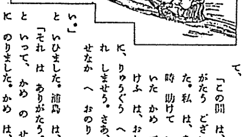
うらしま は おもしろがつて、うち へ かへる の も わすれて ゐました。

5　昭和八年発行（第四期国定国語教科書）

小學國語讀本　巻三

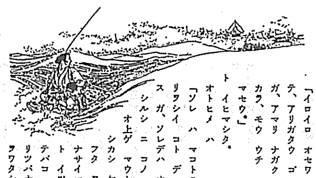
むかし、浦島太郎 と いふ 人 が ありました。
ある日、はまべ を 通って みる と、子ども が 大ぜい 集って、何か さわいで ゐました。見る と、かめ を 一ぴき つかまへて、ころがしたり、たゝいたり して いぢめて ゐる の です。浦島 は、
「そんな かはいさうな こと を する もの では ない よ。」
と いひます と、子どもら は、
「何、かまふ もの か、ぼくたち が つかまへた の だ もの。」
と いって、なかなか 聞きません。浦島 は、
「それなら、をぢさん に その かめ を 賣って おくれ。」
と いって、かめ を 買取りました。

浦島 は、かめ の せなか を なでながら、
「もう 二度 と つかまる な よ。」
と いって、海 へ はなして やりました。
それから 二三日 のち の こと でした。浦島 が、舟 に のって、いつも の 通り つり を して ゐる と、
「浦島さん、浦島さん。」
と、呼ぶ もの が あります。だれ だらう と 思って、ふりかへって 見る と、大きな かめ が、舟 の そば へ およいで 來て、ぴょこり と おじぎ を しました。さうして、
「この間 は、ありがたう ございました。私 は、あの 時 助けて いたゞいた かめ です。けふ は、おれい に、りゅうぐう へ おつれ しませう。さあ、私の せなか へ おのり 下さい。」
と いひました。浦島 は、
「それ は ありがたう。」
と いって、かめ の せなか に のりました。かめ は、だんだん 海 の 中 へ はいって 行きました。



しばらく 行く と、向かふ に 赤や、青や、黄 で ぬった、りっぱな 門 が 見えます。かめ が、

ウマイ ゴチソウ モ 毎日 タベル ト、シマヒ ニハ イヤ ニ ナリマス。オモシロイ アソビ モ 毎日 見ル ト、シマヒ ニハ アキテ キマス。
ソノ ウチ ニ ウラシマ ハ ウチ ヘ カヘリタク ナツタ カラ、アル 日 オトヒメ ニ、

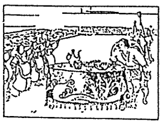


「イロイロ オセワ ニ ナツテ、アリガタウ ゴザイマスガ、アマリ ナガク ナリマス カラ、モウ ウチ ヘ カヘリマセウ。」
ト イヒマシタ。
オトヒメ ハ
「ソレ ハ マコトニ オナゴリヲシイ コト デ ゴザイマス ガ、ソレデハ オワカレノ シルシ ニ コノ ハコ ヲ オ上ゲ マウシマセウ。シカシ ケツシテ フタ ヲ オアケ ナサイマス ナ。」
ト イツテ、タマテバコ ト イフ リツパナ ハコ ヲ ワタシマシタ。
ウラシマ ハ ハコ ヲ モラツテ、マタ カメ ノ セナカ ニ ノツテ、海 ノ 上 ヘ 出テ 来マシタ。ウチ ヘ カヘツテ 見ル ト、オドロキマシタ、父 モ 母 モ シンデ シマツテ、ジブン ノ ウチ モ アリマセン。トモダチ モ ミンナ ヰナク ナツテ、知ツテ ヰル モノ ハ 一人 モ アリマセン。何ダカ カナシクテ カナシクテ タマリマセン。アマリ カナシク ナツタ カラ、オトヒメ ノ イツタ コト モ ワスレテ、タマテバコ ヲ アケテ 見ル ト、中 カラ 白イ ケムリ ガ 出テ、ウラシマ ハ ニハカ ニ オヂイサン ニ ナツテ シマヒマシタ。

が、その うち に かへりたく なつて、おとひめ に
「いろいろ おせわ に なりました。あまり 長く なります から、もう おいとま に いたしませう。」
と いひました。
おとひめ は

「それ は まことに おなごりをしい ことで ございます。それ では この 玉手箱 を 上げます。どんな こと が あつても、ふた を おあけ なさいます な。」
と いつて、きれいな 箱 を わたしました。
うらしま は 玉手箱 を もらつて、又 かめ の せ中 に のつて、海 の 上 へ 出て きました。
うち へ かへつて みる と、おどろきました、父 も 母 も しんで しまつて、うち も なくなつて ゐて、村 の やうす も すつかり かはつて ゐます。しつて ゐる もの は 一人 も ありません。かなしくて たまりません から、おとひめ の いつた こと も わすれて、玉手箱 を あけました。あける と、箱 の 中 から 白い けむり が ぱつと 出て、うらしま は たちまち 白が の おぢいさん に なつて しまひました。

「浦島さん、あれ が りゅうぐう の ご門です。」
と いひました。
間もなく ごてん へ つきました。たひ や、ひらめ など が、むかへ に 出て 来て、おく の、りっぱな ごてん へ 通しました。美しい 玉 や 貝 で かざった、その ごてん は、目 も まぶしい ほど きれいです。そこ へ、おとひめさま が 出て いらっしゃいました。さうして、

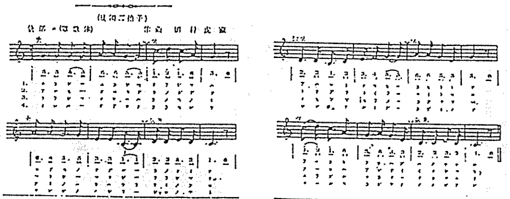


「この間 は、かめ を 助けて 下さって、ありがたう ございます。どうぞ、ゆっくり あそんで いって 下さい。」
と いって、いろいろ ごちそう を して 下さいました。たひ や、ひらめ や、たこ など が、大ぜい で、おもしろい をどり を をどりました。
浦島 は、あまり おもしろい ので、家 へ かへる の も 忘れて、毎日 毎日、たのしく くらして ゐました。しかし、そのうち に、おとうさん や おかあさん の こと を かんがへる と、家 へ かへりたく なりました。そこで、ある日、おとひめさま に、
「どうも 長く おせわ に なりました。あまり 長く なります から、これ で おいとま を いたします。」
と いひました。
おとひめさま は、しきり に 止めました が、浦島 が どうして も 聞きません ので、
「それ では、この 玉手箱 を あげます。しかし、どんな こと が あって も、ふた を あけて は なりません。」
と いって、きれいな 箱 を おわたし に なりました。
浦島 は、玉手箱 を かゝへ、かめ に のって 海 の 上 へ 出ました。もと の はまべ へ かへって 来ます と、おどろきました。村 の やうす は、すっかり かはって ゐます。住んで ゐた 家 も なく、おとうさん も、おかあさん も、死んで しまって、知った 人 は、一人 も をりません。これ は どう した こと か と、浦島 は、箱 を かゝへながら、ゆめ の やう に、あちら こちら と 歩きまはりました。
こんな 時 に 玉手箱 を あけたら、どう か なる かも 知れない と 思って、おとひめさま の いった こと も 忘れて、その ふた を あけまし

た。すると、中 から、白い けむり が すうと 立ちのぼりました。それ が かほ に かゝった か と 思ふ と、浦島 は、かみ も、ひげ も、一度 に まっ白 に なって、しわだらけ の おぢいさん に なって しまひました。

6　明治三十六年発行『教科適用小年唱歌』

うらしまたろー



うらしまたろー

作歌　石原和三郎

一、むかし〳〵、うらしまは、
こどものなぶる、かめをみて、
あはれとおもひ、かひとりて、
ふかきふちへぞ、はなちける。

二、あるひおほきな、かめがでて、
「もうし〳〵、うらしまさん、
りうぐうといふ、よいところ、
そこへあんない、いたしましよう」

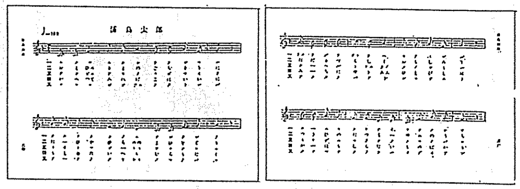
三、うらしまたろーは、かめにのり、
なみのうへやら、うみのそこ、
たひ、しび、ひらめ、かつを、さば、
むらがるなかを、わけてゆく。

四、それはおどろく、からもんや、
さんごのはしら、しやこのやね、
しんじゆやるりで、かざりたて、
よるもかがやく、おくごてん。

五、おとひめさまの、おきにいり、
うらしまたろーは、三ねんを、
りうぐうじやうで、くらすうち、
わがやこひしく、なりにけり。

六、かへりてみれば、いへもなし、
これはふしぎと、たまてばこ、
ひらけばしろき、けむりたち、
しらがのおぢいと、なりにけり。

7　明治三十八年発行『尋常小学唱歌』



一〇、浦島太郎

一、昔〳〵浦島は
助けた龜に連れられて
龍宮城へ來て見れば
繪にもかけない美しさ。

二、乙姫様の御馳走に
鯛や比目魚の舞踊
たゞ珍しく面白く
月日のたつも夢の中。

三、遊にあきて氣がついて
お暇乞もそこ〳〵に
歸る途中の樂しみは
土産に貰った玉手箱。

四、歸って見ればこは如何に
元居た家も村も無く
路に行きあふ人々は
顔も知らない者ばかり。

五、心細さに蓋とれば
あけて悔しき玉手箱
中からぱっと白煙
たちまち太郎はお爺さん。

中学二年　国語　「浦島太郎」　補助資料　（五）

☆「日本書紀」　雄略紀

二十二年の春正月の己酉の朔に、白髪皇子を以て皇太子とす。
秋七月に、丹波国の餘社郡の管川の人瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化為る。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山に到りて、仙衆を歴り観る。語は、別巻に在り。

☆「万葉集」巻九

水江の浦の島子を詠む一首　并せて短歌

1740 春の日の　霞める時に　住吉の　岸に出で居て　釣舟の　とをらふ見れば　いにしへの　ことぞ思ほゆる　水江の　浦の島子が　鰹釣り　鯛釣りほこり　七日まで　家にも来ずて　海境を　過ぎて漕ぎ行くに　海神の　神の娘子に　たまさかに　い漕ぎ向ひ　相とぶらひ　言成りしかば　かき結び　常世に至り　海神の　神の宮の　内のへの　妙なる殿に　たづさはり　ふたり入り居て　老いもせず　死にもせずして　長き世に　ありけるものを　世間の　愚か人の　我妹子に　告りて語らく　しましくは　家に帰りて　父母に　事も告らひ　明日のごと　我れは来なむと　言ひければ　妹が言へらく　常世辺に　また帰り来て　今のごと　逢はむとならば　この櫛笥　開くなゆめと　そこらくに　堅めし言を　住吉に　帰り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　あやしみと　そこに思はく　家ゆ出でて　三年の間に　垣もなく　家失せめやと　この箱を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと　玉櫛笥　少し開くに　白雲の　箱より出でて　常世辺に　たなびきぬれば　立ち走り　叫び袖振り　こいまろび　足ずりしつつ　たちまちに　心消失せぬ　若かりし　肌も皺みぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　息さへ絶えて　後つひに　命死にける　水江の　浦の島子が　家ところ見ゆ

反歌

1741 常世辺に　住むべきものを　剣大刀　汝が心から　おそやこの君

1740 春の日の霞のたなびく時に、住吉の海岸の崖に腰を下ろして沖行く釣舟がのどかに波に揺れるさまを見ると、いつか心は大昔の物語の中に引き入れられていく。あの水江浦の島子が、鰹釣りや鯛釣りに夢中になって、七日経っても家に帰らずに、海の果てのわだつみの国との境も越えて漕いで行って、海神のお嬢様にひょっこりと行き逢い、声をかけ合って話が決ったので、行末を契って海の彼方の常世の国まで行き、海神の宮殿の奥深い所にあるきらびやかな御殿に、手を取り合って二人きりでこもって、老いの悲しみも死の苦しみも知らずに長い間楽しい日々を送っていたというのに、愚かな俗世の人であるこの男がいとしい妻にこう言ってしまった。「ほんのしばらく家に帰って、父母に私たちのことをうち明け、明日にでも私は帰って来よう」と。そこで妻が言うには、「常世の国にまた帰って来て、今と同じに私と逢いたいと思うなら、この櫛笥を開けないでね、けっして、けっして」と。ああ、あんなに堅く約束したのに、住吉に帰り着いて、家を探してもその家が見つからないし、里はどこかと見てもその里さえ見当らないので、どうも変だと思ってそこでこう考えた。「家を出てからたった三年の間に、垣根や家までなくなってしまうものか」と、「この箱を開けてみたならば、さぞもとどおりの家が現われるだろう」と。そこで櫛笥をちょっと開けたところが、白い雲が箱から立ち昇って、ただ常世の国へとたなびいて行くだけだったので、走り廻り、わめきちらして袖を振り、ころげ廻って地団駄踏むうちに、にわかに気を失ってしまった。若々しい肌も皺だらけとなった。黒々とした髪もまっ白になった。あげくの果ては息も絶えてとうとう死んでしまった。その水江浦の島子の家のあった跡が、今、私の目の前にある。

『雄略紀』以下、『浦島子伝』など、いずれも丹後での話とし、亀を釣ることをきっかけとする点がこの歌と異なる。住吉にも類話があったか。あるいは住吉を舞台にして、作者が新たに構成したか。○春の日の…　初二句は霞で縁化しながら物語的世界を提示している。○とをらふ　波のうねりにまかせて揺れる。○鰹釣り鯛釣りほこり　鰹は釣れ出すといくらでもかかる魚（『高橋氏文』）。止められないほど漁獲が多いのは海神の意にかなったためとの含みがある。○七日　日数の多さを表わす常套語。○海境　海の果てにある人の国と海神の国との境界。○たまさかに　偶然に。○常世　海の彼方の不老不死の国。ここでは海神の国。○世間の愚か人　常世の国の人に対してこう言った。○櫛笥　女の象徴である櫛を収める箱。開けなければ再会が保証される。○立ち走り…　以下四句、失ったものを必死に求める行為、精神を表わす常套句。○たちまちに…　以下下句、不老不死の常世に対し終老死をいう。

1741 常世の国に住み通せる身であったのに、自分自身の料簡から思いがけない結末となったことだ。何という愚か者か、この浦の島子というお方は。○剣大刀　「汝」の枕詞。刃の意の古語「な」を介してかかる。○汝　二人称に関する古い代名詞。あなた自身。○おそ　思慮の浅いことを表わす語。

中学二年　国語　「浦島太郎」　補助資料　（六）

図1　「鉢かづき」

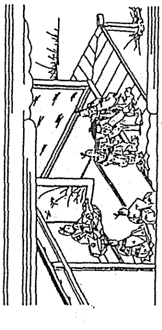


図2　「さざれ石」

図3　「梵天国」

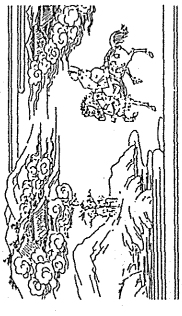


図4　「二十四孝」

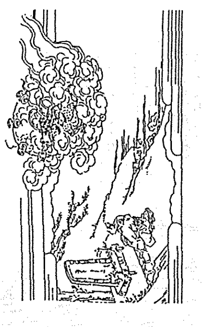


図5　「鉢かづき」

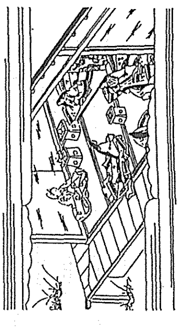


図6　「文正草子」

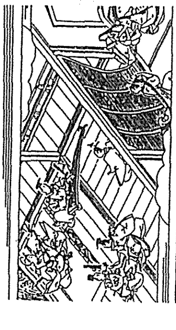


図7　「文正草子」

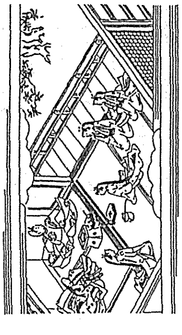


図8　「小町草子」

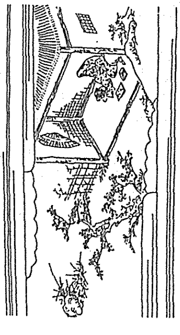
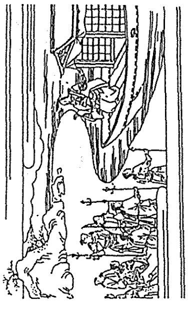


図9　「小町草子」

図10　「御曹子島渡」



中学二年　国語「浦島太郎」補助資料（七）

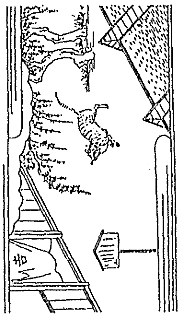
図11「猫の草子」


図12「酒呑童子」

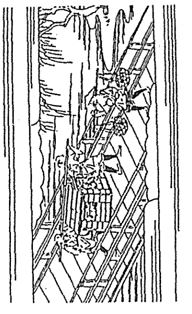
図13「猿源氏草紙」


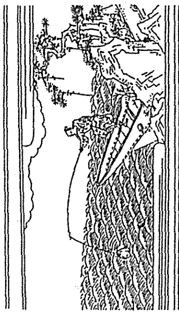
図14「蛤の草紙」


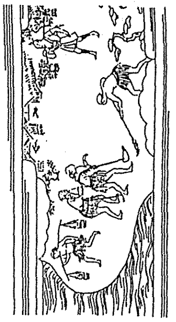
図15「文正草子」


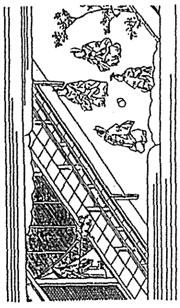
図16「猿源氏草紙」


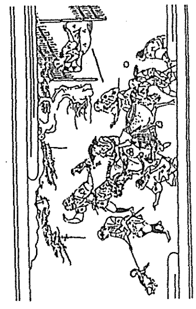
図17「ものくさ太郎」


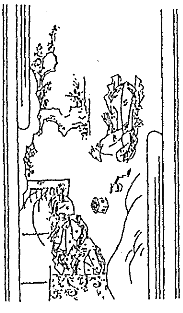
図18「木幡狐」


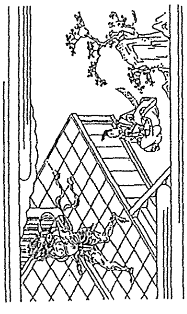
図19「御曹子島渡」


図20「酒呑童子」

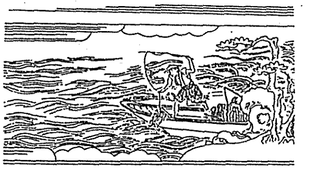
中学二年　古文　御伽草子『浦島太郎』（一）

浦島太郎

昔、丹後国に浦島といふ者侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年の齢二十四五の男ありけり。明け暮れ、海のうろくづを取りて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣をせんとて出でにけり。浦々島々、入江入江、至らぬ所もなく、釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。浦島太郎、この亀に言ふやう、「なんぢ、生あるものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。たちまち、ここにて命を断たんこと、いたはしければ、助くるなり。常には、この恩を思ひ出すべし」とて、この亀をもとの海に返しける。

L第7時

かくて、浦島太郎、その日は暮れて帰りぬ。また次の日、浦の方へ出でて、釣をせんと思ひ見ければ、はるかの海上に、小船一艘浮べり。怪しみやすらひ見れば、うつくしき女房、ただ一人波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ着きにけり。浦島太郎が申しけるは、「御身いかなる人にてましませば、かかる恐ろしき海上に、ただ一人乗りて御入り候ふやらん」と申しければ、女房言ひけるは、「されば、さる方へ便船申して候へば、折節、波風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人ありて、みづからをば、このはし舟に乗せて放されけり。悲しく思ひ、鬼の島へや行かんと、行方知らぬ折節、ただ今人に逢ひ参らせ候ふ、この世ならぬ御縁にてこそ候へ。されば、虎狼も、人を得んとこそ候へ」とて、さめざめと泣きにけり。浦島太郎も、さすが石木にあら



丹後国の浦島太郎は、釣り上げた亀を放してやり、その化身の女と契りを結んで、龍宮城でしあわせに過ごした。三年たって故郷に帰ってみると、こちらでは七百年がたっており、すっかり変わっていた。そこで、亀からの形見の箱をあけてみると、たちまち老いて鶴となり、龍宮城の亀とともに神として現われたという。龍宮女房型の異類婚姻譚であるが、『日本書紀』『万葉集』『続浦島子伝』など、かなり多くの文献に伝えられている。この御伽草子に至って動物報恩譚の要素を加えて、本地物の傾向をも示している。

一 京都府北部。
二 『万葉集』一七四〇に「水江の浦島子」とあって、古くから「浦島子」として知られていたが、ここに至って「太郎」という名をつけられたものである。
三 鱗。魚をさす。
四 「つれづれ」は、さしあたって何もすることがない状態をいう。
五 海藻の類。
六 未詳。淡路島の「絵島が磯」を思い寄せたものか。

挿絵は、浦島太郎が亀を釣り上げる場面。

七 清音でよむ。
八 「やすらふ」は進まずしりぞかずにためらう、足をとどめてたたずむ意。
九 婦人、女。
一〇 「入る」は尊敬語を伴って、おいでになる意。
一一 古梓堂文庫蔵絵巻に「されはとよ、へちの御事にてもなし、みつからを、ある人のさんけんにより、うつほふねにつくりこめ、かやうになんかいにすてられけれは、いかなるきかいかしま、をにのすみかへも、なかれゆき候やらんと、さも心ほそくおもひしに、かやうのつり人にあへる事こそ、これ又せんせのきえんなり」とある。
一二 都合のよい船、ついでの船に乗って。
一三 一人称の代名詞。身分の高い婦人の用いたことば。
一四 端舟。小舟。
一五 この世だけでない、前世からの。夫婦の関係は二世の縁であるという。
一六 「おほかみ」に同じ。山犬。
一七 石や木のような非情なものではないので。石木は情けのないものにたとえられる。

中学二年　古文　御伽草子『浦島太郎』（二）

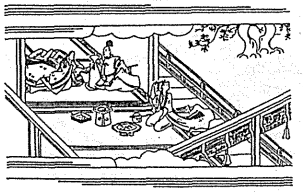
ざれば、あはれと思ひ、綱を取りて、引き寄せにけり。(絵) さて、女房申しけるは、「あはれ、われらを本国へ送らせ給ひてたび候へかし。これにて棄てられ参らせば、わらはいづくへ何となり候ふべき。棄て給ひ候はば、海上にてのもの思ひも、同じことにてこそ候はめ」と、かきくどき、さめざめと泣きければ、

浦島太郎も、あはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日あまりの船路を送り、故里へぞ着きにけり。

さて、船よりあがり、いかなる所やらんと思へば、銀の築地を築きて、金の甍を並べ、門を建て、いかならん天上の住居も、これにはいかでまさるべき。この女房の住み所、なかなか言葉にも及ばれず、なかなか申すもおろかなり。さて、女房の申しけるは、「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、みなこれ他生の縁ぞかし。ましてや、はるかの波路を、はるばると送らせ給ふこと、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契りをもなし給ひて、同じ所に明し暮し候はんや」と、こまごまと語りける。(絵) 浦島太郎申しけるは、「ともかくも、仰せに従ふべし」とぞ申しける。さて、偕老同穴のかたらひも浅からず、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、たがひに鴛鴦の契り浅からずして、明し暮させ給ふ。

さて、女房申しけるは、「これは龍宮城と申す所なり。この所に、四方に四季の草木を現せり。入らせ給へ、見せ申さん」

第8時



＊挿絵は、美しい女が舟に乗って、浦島太郎のもとに着く場面。
一 感動の声を表わす。
二 一人称の代名詞。単数の謙称にも用いられる。
三 「たぶ」は「たまふ」と同じ意。
四 一人称の代名詞。武家の婦女がへりくだって言う。
五 「かきくどく」は「くどく」を強めた言い方。「くどく」は、しきりに思いを述べ訴える意。
六 女の乗ってきた舟。
七 泥土で塗り固めた土塀。
八 屋根に葺いた瓦。
九 とても、まったく。
一〇 申すまでもない、申し尽くせない。
一一 一本の木の陰に宿り、同じ川の水を汲む、そんなちょっとしたことも、すべて前世からの縁である。
＊挿絵は、浦島太郎が女といっしょに龍宮城で暮らす場面。
一二 夫婦の仲のむつまじく変わらないこと。生きてはともに老い、死しては穴を同じくするの意。
一三 男女の契りの深いことを示す決まり文句。
一四 夫婦の仲のむつまじいこと。
一五 龍宮城に当たるものは『万葉集』(一七四〇・一七四一)に「常世」とあり、『日本書紀』雄略紀に「蓬萊山」とある。ここで龍宮城というのも、常世や蓬萊に通ずる海中の異郷として語られている。
一六 四方に四季を表わすことは、異郷の景観の特色として、『すゑひろ物語』『不老不死』『貴船の本地』『田村の草子』など、室町時代の物語草子に多く認められる。

中学二年　古文　御伽草子『浦島太郎』（三）

とて、ひき具して出でにけり。まづ東の戸をあけて見ければ、春の景色とおぼえて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞の内よりも、鶯の音も軒近く、いづれの梢も花なれや。南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春を隔つる垣穂には、卯の花やまづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蝉の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通る時鳥、鳴きて夏とや知らせけり。西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、ませの内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分け分けて、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さてまた北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の梢も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らする景色かな。(絵)

かくて、おもしろきことどもに、心を慰み、栄華に誇り、明し暮し、年月を経るほどに、三年になるは程もなし。浦島太郎申しけるは、「われに三十日の暇をたび候へかし。故里の父母を見捨て、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御ことを、心もとなく候へば、会ひ奉りて、心安く参り候はん」と申しければ、女房仰せけるは、「三年が程は、鴛鴦の衾の下に比翼の契りをなし、片時見えさせ給はぬさへ、とやあらん、かくやあらんと、心を尽し申せしに、今別れなば、またいつの世にか逢ひ参らせ候はんや。二世の縁と申せば、たとひこの世にてこそ、夢幻の契りにて候ふとも、かならず来世にては、一つ蓮の縁と生れさせおはしませ」とて、さめざめと泣き給ひけり。また、女房申しけるは、「今は何をか包み候ふべき。みづからは、この龍宮城の亀にて候ふが、ゑじまが磯にて、御身に命を助けられ参らせて候ふ、その御恩報

第9時

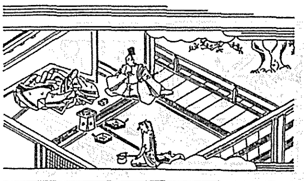
一 引き連れて、連れていって。
二 柳の枝の細いのを糸に見立てていう。「柳の糸も春風になびく」と「なびく霞」とをかける。
三 垣根。「穂」は接尾語。
四 空木の花。ユキノシタ科の落葉低木。初夏に白色の花をつける。
五 「蓮」の古語。
六 籬。竹や木で作った目のあらい垣。
七 萩。「真」は美称。
八 ぞっとするほどものさびしい。
九 「雪」にかかる枕詞。「白妙」は楮の木などの木の皮の繊維で織った布。
一〇 谷の入口、谷口。
一一 隠れもないいやしい者の仕事。炭焼の煙によって、炭焼のわざが、はっきり知られることをいう。
＊挿絵は、女が浦島太郎に春の景色を見せる場面。
一二 ほんの一時だけ、まにあわせに。
一三 男女のともに寝る夜具。
一四 こうであろうか、ああであろうか。
一五 夫婦の関係は二世のほかで、現世と来世とにわたるという。
一六 極楽で同じ蓮華の上に生まれあうこと。
一七 「今は何を包み隠しましょうか、実は」と、真実をうちあけることば。
一八 禿氏祐祥氏旧蔵写本に「みつからは、このりうくうのおとのひめにて候か、かめの姿に身をへんし、かいしやうにあそひしに、ゑしまかいそにて、御身にいのちをたすけられまいらせて候」とある。

じ申さんとて、かく夫婦とはなり参らせて候ふ。またこれは、みづからがかたみに御覧じ候へ」とて、左の脇よりいつくしき箱を一つ取り出し、「あひかまへて、この箱をあけさせ給ふな」とて渡しけり。会者定離のならひとて、会ふものにはかならず別るるとは知りながら、とどめがたくて、かくなん、

日数経て重ねし夜半の旅衣たち別れつついつかきて見ん

浦島、返歌、

別れ行く上の空なる唐衣契り深くはまたもきて見ん



さて、浦島太郎は、たがひに名残を惜しみつつ、かくてあるべきことならねば、かたみの箱を取り持ちて、故里へこそ帰りけれ。忘れもやらぬ来し方行く末のことども思ひ続けて、はるかの波路を帰るとて、浦島太郎、かくなん、

第10時

かりそめに契りし人のおもかげを忘れもやらぬ身をいかがせん

さて、浦島は、故里へ帰り見てあれば、人跡絶えはてて、虎臥す野辺となりにけり。浦島、これを見て、こはいかなることやらんと思ひ、ある傍を見れば、柴の庵のありけるに、立ち、「もの言はん」と言ひければ、内より八十ばかりの翁出であひ、「誰にてわたり候ふぞ」と申せば、浦島申しけるは、「この所に、浦島の行方は候はぬか」と言ひければ、翁申すやう、「いかなる人にて候へば、浦島の行方をば、御尋ね候ふやらん、不思議にこそ候へ。その浦島とやらんは、はや

一 乱氏本に「なりまいらせて候ぞや」とある。
二 かたちの整った、美しい箱。いわゆる玉手箱をさす。
三 よく注意して、けっして。
十插絵は、女が浦島太郎に形見の箱を渡す場面。
四 会う者はかならず離れる。人生の無常をいうことば。
五 乱氏本に、第三句「からころも」とある。「衣」の縁語で「たち」「きて」を出して、「裁ち」と「立ち」とをかけ、「着て」と「来て」とをかける。
六 「衣」の縁語で「きて」を出して、「着て」と「来て」とをかける。
七 人の足跡、人の往来した跡。
八 虎のすむような荒れはてた野原。
九 これはどういうことであろうか。
一〇 とある片路を見ると、ふとそばを見ると。
一一 雑木で葺いた粗末な小家。
一二 乱氏本に「たちより」とある。
一三 案内を乞うときに言うことば。
一四 「わたる」は「あり」「をり」の敬語。
一五 乱氏本に「うらしませうしといふ人の」とある。
小插絵は、老人が浦島太郎にその廟所をさし示す場面。

七百年以前のことと申し伝へ候ふ」と申しければ、太郎おほきに驚き、こはいかなることぞとて、そのいはれをありのままに語りければ、翁も、不思議の思ひをなし、涙を流し申しけるは、「あれに見えて候ふ古き塚、古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へてこそ候へ」とて、指をさして教へける。太郎は、泣く泣く、草深く露しげき野辺を分け、古き塚に参り、涙を流し、かくなん、

かりそめに出でにし跡を来て見れば虎臥す野辺となるぞ悲しき

さて、浦島太郎は、一本の松の木陰に立ち寄り、あきれはててぞゐたりける。太郎思ふやう、亀が与へしかたみの箱、あひかまへてあけさせ給ふなと言ひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。この箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。これを見れば、二十四五の齢も、たちまちに変りはてにける。

第11時

さて、浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りける。そもそも、この浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中にたたみ入れにけり。さてこそ、七百年の齢を保ちける。あけて見るなとありしを、あけにけるこそよしなけれ。

君に逢ふ夜は浦島が玉手箱あけて悔しきわが涙かな

と、歌にも詠まれてこそ候へ。生あるもの、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや、人間の身として、恩を見て恩を知らぬは、木石に譬へたり。情深き夫婦は、二世の契りと申す

一 廟所。乱氏本に「あとのしるし」とある。
二 今はどうしようか、もうしかたがない。
小插絵は、浦島太郎が形見の箱をあけて、たちまち老人となる場面。
三 乱氏本に「廿四五のよはひかはりはて丶、たちまちにはくはつのおきなとなるこそあはれなれ」とある。
四 かいがない、くだらない。
五 「浦島が玉手箱」は、序詞のように「あけて悔しき」にかかる。「あけて」は、箱をあける意と夜が明ける意とをかける。
六 室町時代のことわざ。幸若舞『屋島軍』に「恩を見て恩を知らざるをば鬼畜木石にたとへたり」、同『百太』に「恩を知らぬ者はただ木石のごとし」とある。
小插絵は、鶴と亀とが遊ぶ場面。

中学二年　古文　御伽草子『浦島太郎』（六）

が、まことにありがたきことどもかな。浦島は鶴になり、蓬莱の山にあひをなす。亀は、甲に三せきのいわゐをそなへ、万代を経しとなり。さてこそめでたきためしにも、鶴亀をこそ申し候へ。ただ人には情あれ、情のある人は、行く末めでたきよし申し伝へたり。その後、浦島太郎は、丹後国に浦島の明神とあらはれ、衆生済度し給へり。亀も、同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

一 中国の想像上の神山。 二 「遊びをなす」または「会ひをなす」か。飛氏本に「あそひをなす」とある。 三 「三せきのいわゐ」は未詳。「いわゐ」は「祝ひ」か。飛氏本に「かめは、かうに三さよくをそなへ、ともによろつよをふるといへり」とある。「三さよく」は「三徳」で、天・地・人か。 四 先例、前例。 五 幸若舞「山中常盤」に「たんだ人には情あれ、情は人のためならず」とある。 六 京都府与謝郡伊根町の宇良神社は浦島太郎を祭ると伝えられ、『浦島明神縁起絵巻』を所蔵している。 七 仏菩薩などが、すべての生物を救って、悟りの世界へ導くこと。

第12時

【参考】

関敬吾編「一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎－日本の昔ばなし（Ⅲ）－」より

昔、北前の大浜に、浦島太郎という人がいました。七十みまって八十に近い、一人の母親と二人でくらしていました。浦島は漁師でした。まだひとり者で、ある日、母親が「浦島よ、浦島よ、わたしが丈夫なうちに嫁をもらってくれ」「わしはまだ嫁がないから、もらっても食べさすことができん。お母があるあいだは、日に日に漁をして、このままで暮らすわい」と、浦島はいいました。

やがて月日がたって、母親は八十、浦島は四十の年になりました。秋のころは北風が、まい日まい日吹いて、漁にも行くことが出来ぬ。魚がとれないので金にもならぬ。そこでお母をたべさすことも出来ないようになりました。「明日は天気になればよいのに」と思って、寝ころんでいました。空模様がいつの間にかよくなっていたので、とび起きて漁舟にのって魚釣りに行きました。東が明るくなるまで釣っても魚は一つもかからぬ、これは困ったことだと思っていると、日があがったころに大きな魚が餌にくいつきました。いそいであげて見ると、亀がかかっていました。亀は両手を舟べりへもたせかけても、なかなか逃げようともしない。浦島は「鯛かと思えばなんだ、お前は亀だ。お餌がいるからほかのは食わんのだ。はなしてやるから早くよそへ行け」といって、亀を潮の中になげこみました。

浦島はきざみ煙草でもすってまた釣ったが、どうしても食いつかぬ。困っていると、釣糸にまた大魚が餌をくったらしい手ざわりがしました。あげて見ると、こんども亀がかかって来ました。「あれほど、よそへ行くように言ってやったのに、魚はかからないで亀がつれるとは、よくよく運がわるいものだ」そうは思ったが、また逃がしてやりました。魚を釣らないと帰ることも出来ないので、辛抱して一綱ばかり釣っていると、またなにか在うたものがありました。こんどこそは魚だろうと釣りあげてみると、やはり亀でありました。そこでまた逃がしてやりました。そうこうしているうちに、日が入りかけて来たが、いっこうに魚は釣れぬ。日が沈んでしまったので、帰ってお母にどういおうかと思いながら、櫓舟を押していると向うに渡海舟が見えました。そうして何か用があるのか、浦島の方へやって来ました。浦島が舟をおさえる（右舷に向ける）と、向うの舟もおさえる。こちらの舟がひかえる（左舷に向ける）と、渡海舟もひかえる。そしてとうとう浦島が舟と並んでしまいました。渡海舟の船頭が「浦島さん、どうぞこの舟に乗っておくれ。竜宮の乙姫さまからのお迎えじゃ」といいました。「俺が竜宮界に行ったならば、あとにはお母が一人だけのこるから、そんなことは出来ない」「お母には不自由なくしてあげとくから、この舟にお乗りまし」と、船頭がいうものだから、浦島はなに思わず渡海舟に乗りこんでしまいました。渡海舟は、やがて浦島を乗せると、潮の中へもぐって竜宮界に行ってしまいました。

浦島が行って見ると、りっぱな御殿でありました。お姫さまはお客がすいたろうといって、浦島にご馳走をして、「二、三日遊んで帰るがよい」といいました。浦島も竜宮界へ来て見ると、乙姫さまやきれいな娘もたくさんいるし、着物を着かえさせてくれるしするので、おもわず竜宮界で三年という月日がたってしまいました。そこでもういになかなか（帰る）と思い、乙姫さまにいとまごいをすると、三段ねの玉手箱をくれました。そして「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」と、教えてくれました。それから渡海舟にのせて、ここの山の森みたようなところに舟をつけてくれました。

浦島は、村に帰って見ると山の形も変っているし、囲の木もなくなって枯れているのもありました。「三年しか留守にしなかったのに、どうしたことだろうか」と考えながら家の方へ行くと、わら葺きの家に老人がわら仕事をしていました。その家に入って挨拶をしてから、「浦島太郎という人間を知っているか」と、わがことをたずねて見ました。するとその老人は「わしの祖の代に、浦島という人が竜宮界へ行ったがなんぼ待ってももどってこなかったことがあったという話だ」と、話して聞かせました。そこで浦島は「その人のお母はどうしたろうか」とたずねると、とうの昔に死んでしまったということでありました。

浦島はわが家の跡へ行って見ました。手洗鉢の石と庭の踏石だけがあったが、ほかには何もなかった。思案にくれて、箱の蓋をあけて見ると、最初の箱には鶴の羽が入っていました。もう一つの箱の蓋をあけて見ると、中から白い煙があがりました。その煙で浦島は爺になってしまいました。三ばん目の箱の蓋をあけて見ると鏡が入っていました。その鏡で顔を見ると、爺さまになっていました。ふしぎなことだと思って見ていると、さっきの鶴の羽が背中についてしまいました。そこで飛び上って母の墓のまわりを飛んでいると、乙姫さまが亀になって浦島を見に来て、浜へはいよっていました。

鶴と亀とは舞をまうという伊勢音頭は、それから出来たものだそうである。

——香川県仲多度郡——

〔高校　－『源氏物語絵巻』を利用した『源氏物語』の学習指導－〕

（日時）　1992年11月20日（金）　第２校時

（授業者）　石井正己

（授業クラス）　高等学校２年１組　男子生徒40名（学級担任のクラス）

（研究テーマ）　中・高６ヶ年を見通した古典教材の編成

（教材）　『源氏物語絵巻』・『源氏物語』

（教材設定の理由）

『源氏物語』は日本古典の最高傑作として，高２や高３で読まれ続けてきた。しかし，その文章は他の作品に比べて難解であり，その内容は密通などを含んでいるので，扱いにくい。そのためか，従来，高校２年生では「若紫」の巻の一節を読む程度で終わり，作品の全体像を捉えるまでに至らないことが多いようだ。そこで，現在までの研究の成果を積極的に取り入れて，光源氏の人生を大きく捉えさせてみたいと考えた。特に，その後半生を理解させる際に，約１世紀後に描かれた『源氏物語絵巻』を利用することを試みた。この絵巻は，美術品として優れているだけでなく，物語を深く理解して描いているからである。残念ながら，現存するものは限られているので，今回は，柏木１～３に焦点をあてて授業を展開する予定である。

（指導の展開　全17時間の予定）

A．『源氏物語』の成立と本質（４時間）

第１時　物語文学の作者について説明

「繰り言のやうにははべれど」（『無名草子』）の読解

第２時　「繰り言のやうにははべれど」（『無名草子』）の読解

「日本紀の御局」など（『紫式部日記』）の説明

第３時　国学（古典研究）について説明

「ある人問ひけるは」（本居宣長『源氏物語玉の小櫛』）の読解

第４時　「ある人問ひけるは」（本居宣長『源氏物語玉の小櫛』）の読解

「もののあはれ」論について考察

B．光源氏の前半生〔桐壺巻～藤裏葉巻〕（５時間）

第５時　光源氏の誕生　・冒頭の一文の読解

・後宮制度の説明

・誕生の一文の読解とその後

第６時　光源氏の恋愛　・結婚のタブーを考察

・折口信夫の「色好み」論を説明

・藤壺女御との密通と紫の上の掠奪を考察

第７時　光源氏の流離　・朧月夜の君との出会いを説明

・六条御息所の生霊を考察

・葵の上の死去と光源氏の道心を考察

第８時　光源氏の栄華　・折口信夫の「貴種流離譚」という考え方を説明

・光源氏と明石一族の関係を説明

・深沢三千男の「潜在王権」論を説明

第９時　光源氏の屋敷　・家の伝領，六条院の構造を説明

・『浦島太郎』の四方四季の庭との違いを考察

・六条御息所の「鎮魂」について考察

C．光源氏の後半生〔若菜上巻～幻巻〕（８時間）

第10時　女三の宮の降嫁と紫の上の苦悩を説明

唐猫の果たした役割を考察

第11時　空白の時間，物語の時間叙述（年立，二つの系統）を説明

明石一族・女三の宮・紫の上・六条御息所の死霊の関係を説明

第12時　六条御息所の死霊の言葉を読解

女三の宮の出産と光源氏の苦悩を読解

第13時　女三の宮の出家希望と光源氏の苦慮を読解

朱雀院の下山の理由を読解

第14時　〈本時〉光源氏・朱雀院・女三の宮の対面を読解（→『絵巻』柏木１）

女三の宮の出家と六条御息所の死霊の関係を考察
第15時　柏木と夕霧の対面を読解（→『絵巻』柏木２）
柏木の死去を読解
第16時　薫の五十日の祝儀を読解（→『絵巻』柏木３）
夕霧と落葉の宮の関係を説明
第17時　紫の上の病気と死去を説明
光源氏の述懐を読解

（本時の計画）

A．目標　①光源氏・朱雀院・女三の宮の対面の様子を理解させる。
②女三の宮の出家と六条御息所の死霊の関係を考えさせる。
③『源氏物語絵巻』柏木１の描き方を理解させる。

B．展開　①本文（294～６頁）を朗読させ，内容を把握させる。

(a)光源氏・朱雀院・女三の宮の会話を読み取らせる。

三人がそれぞれどのようなことを言っているのかを整理しながら板書してゆく。特に，光源氏と女三の宮との間に会話がなく，朱雀院が仲立ちになっていることに注意させる。

(b)朱雀院が女三の宮を出家させた理由を押さえさせる。

(1)女三の宮の「生くべうもおほえはべらぬを，かくおはしましたるついでに，尼になさせたまひてよ」という依頼に応じて，朱雀院は「かくなん進みのたまふを，今は限りのさまならば，片時のほどにても，その助けあるべきさまにて，となん思ひたまふる」と出家させることを考える。出家の前提になっているのが，女三の宮はあとわずかしか生きられそうもない，という点であることに注目させる。

(2)それに対して，光源氏は「日ごろもかくなんのたまへど，邪気なんどの人の心をたぶろかして，かかる方にてすすむるやうもはべなるをとて，聞きも入れはべらぬなり」と反対するが，朱雀院は「物の怪の教にても，それに負けぬとて，あしかるべきことならばこそ憚らめ，弱りにたる人の，限りとてものしたまはんことを聞き過ぐさむは，後の悔心苦しうや」とやはり出家させようとする。光源氏が「邪気」というのに，朱雀院は「物の怪」という違いに注意させる。

②本文（300頁）を朗読させ，内容を把握させる。

(a)六条御息所の死霊の発言を読み取らせる。

物の怪が「このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる」と，女三の宮に憑いていたことを告白するところを中心に扱う。

(b)女三の宮に憑いた時点を押さえさせる。

(1)「日ごろさぶらひつる」は，前の光源氏の発言「日ごろもかくなんのたまへど」に対応している。「かく」はその前の女三の宮の発言「生くべうもおほえはべらぬを，かくおはしましたるついでに，尼になさせたまひてよ」を指す。同様の内容は，さらに前に「尼にもなりなばやの御心つきぬ」とあった。「御心つきぬ」（「つき」は「憑き」）に着目させて，この時点であることを押さえる。

③『源氏物語絵巻』柏木１（資料16）の描きかたを考えさせる。

(a)本文の読解をもとに，源氏物語アンケート（３）を書かせる。

(b)描き方の特徴を押さえ，何を表そうとしたのか発表させる。

(1)『国宝源氏物語絵巻』のビデオの柏木１に関する部分をスクリーンに映し出し（３分程度），柏木１の全体の場面で停止したままにする。

(2)小山清男氏の作図資料（末尾の資料16参照）を拡大コピー（１メートル四方の用紙）にして黒板に添付する。

- 「源氏物語アンケート（３）」の①は，Ａは女三の宮，Ｂは朱雀院，Ｃは光源氏，Ｄ～Ｆは女房であることを確認してゆく。
- 几帳が女三の宮の空間，朱雀院と光源氏の男たちの空間，女房たちの空間を分けていること，女三の宮は「床の下におろしたてまつる」としたので，浜床に下りていること，朱雀院は「御几帳すこし押しやらせたまひて」としたので，几帳がずれていること，光源氏の体の向きが二人に対してやや右にそれていること，そして，この場面は，朱雀院が「御目おし拭はせたまふ」という一瞬を絵画化していることなどに注意をさせる。

(3)「源氏物語アンケート（３）」の②は，Ｄ形式（鳥瞰図式斜投象。非常に少ない）ことを確認する。

(4)「源氏物語アンケート（３）」の③の「なぜこのような描き方をしたと思うか」は，できるだけ自由に発表させる。「不安定な画面の構成，いりみだれる几帳の線など，三者三様の心の乱れを象徴するかのようである」という見方が一般に行われているが，むしろ，「物の怪という特異な存在が構図の決定に関与しているのではないかと考えられる。建物がほとんど真上から覗き込むようになっている不安な構図はそこに原因しているのでないか」という見方を強調しておきたい。この上から覗き込むような視線は，ここで女三の宮に憑いている物の怪の「天翔りても見たてまつれど」（若菜下巻）という視線と一致しているからである。

Ｃ．評価　①三人の気持ちをそれぞれ理解することができたか。

②六条御息所の死霊が女三の宮に憑いた様子を理解することができたか。

③源氏物語アンケート（3）を自分なりに書くことができたか。

（資料）

A．生徒に配付した資料

資料1　「繰り言のやうにははべれど」（『無名草子』）

資料2　「ある人間ひけるは」（本居宣長『源氏物語玉の小櫛』）

資料3　「源氏物語－作者・構成と内容など」（秋山虔編『国語便覧』，中央図書）

資料4　「源氏物語－六条院・系図など」（秋山虔編『国語便覧』，中央図書）

資料5　「源氏物語－巻別主要内容一覧」（秋山虔編『国語便覧』，中央図書）

資料6　「平安京　大内裏・内裏」（秋山虔編『国語便覧』，中央図書）

資料7　「さて，女房申しけるは」（御伽草子『浦島太郎』）（『御伽草子（日本古典文学全集）』4，小学館）

B．生徒と先生方に配布した資料（末尾に添付）

資料8　石井正己「古典文学を読む(1)　猫」（『高校クラスルーム』，1992年6月），猫が御簾を開け，柏木がのぞき見る絵（『絵本源氏物語』，貴重本刊行会）

資料9～15　「柏木」巻本文（頭注・全訳付）（『源氏物語（日本古典文学全集）』4，小学館）

資料16　『源氏物語絵巻』柏木1および小山清男氏の資料

アンケート資料1～2　「夏休みの課題その他」「源氏物語アンケート（1）・（2）」の結果と「源氏物語アンケート（3）」

C．先生方に配布した資料

参考資料1～2　石井正己「〈読み〉の場としての教室－古文の場合－」（『全国私立中学高等学校　第31回　国語科研修会研究収録』，1992年12月）

参考資料3　第5段本文（頭注・傍訳付）（『伊勢物語（新潮日本古典集成）』，新潮社），第5段絵巻（『伊勢物語絵巻』（和泉市久保惣記念美術館蔵）と『異本伊勢物語絵巻』（東京国立博物館蔵）の比較）

参考資料4　『伊勢物語』第5段の実践報告とアンケートの結果

（参考文献）

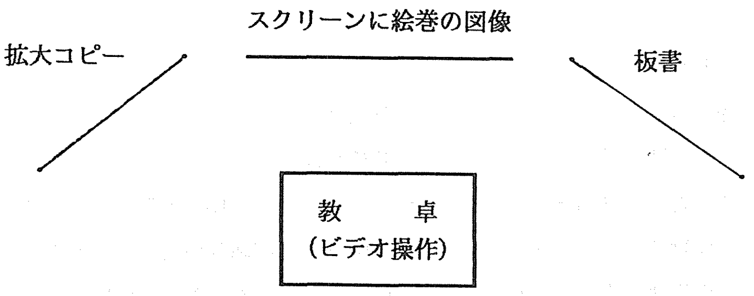
・小山清男「源氏物語絵巻の室内描写とその構図について」（『東京芸術大学美術学部基礎第2研究室研究論集』1，1959年）

・秋山光和『王朝絵画の誕生』（中公新書，1968年）

・藤井貞和「図像と語り－日本」（川田順造・山本吉左右『口頭伝承の比較研究』，弘文堂，1986年）

・藤井貞和「光源氏物語主題論」（『源氏物語の始原と現在』，砂子屋書房，1990年）

（視聴覚設備のある教室の作り方）



（今後の問題）

今回の授業は，視聴覚設備の整ったスペースを使って，今，古文教育が〈情報化〉時代においてどのように実践できるかという試みであった。そのために，『源氏物語絵巻』をはじめ，『国宝源氏物語絵巻』のビデオ，絵巻を図像分析したものの拡大コピーを用いてみた。その授業を終了し，その後の研究協議会における討論を経て，現在考えていることについて，若干の私見を述べておくことにする。

① 『源氏物語』全般を高２で扱う理由

『源氏物語』は，高２で，「若紫」の巻の中の，光源氏が幼い紫の上をのぞき見る場面を扱い，高３（の選択）で，いくつかの有名な場面を扱うというのが一般的なイメージであろうか。もちろん，生徒の学力や関心，そして時間の制約などから，そうした段階を踏むことは適切な配慮であることはよくわかる。だが，我々は，ある作品の一部分を取り上げながらも，その作品の全体像に迫れるようにしておくことが大切になるだろう。そうした考えに立ったとき，『源氏物語』の，特に第２部までは，恋愛と王権との関係を省略することができないはずだから，「若紫」の巻だけではいかにも弱い。古文の学習を親しみやすいものにすることは確かに大切なことだが，何を教えるのかという立場に立って，作品のもつ本質を見失わないようにしたいものだ。

② 頭注・全訳付の本文を使う意義

ここで最も問題になるのは，全訳であろう。なぜなら，古文の授業のかなりの部分は，どのように現代語訳するかというところに費やされてきたと言えなくもないからである。確かに，古文の現代語訳を作るということは，例えば1000年以上の時間を超えて，その言葉を「現代」のものにしようというのだから，非常に困難なことである。しかし，我々は，この現代語訳を作ることをやめて，古文とすでにある現代語訳を比較しながら読むという方法を取ってはどうだろう。それによって，教師と生徒の文法力の差を超えて，教師も生徒もほぼ同じような地点

に立って作品を読んでゆけることになる。そして，〈情報化〉ということに対応してゆこうとするなら，さらにもう一歩先には，現代語訳だけを使った古文の学習も考えられよう。もちろん，古文を原文だけで読める力を付けることは，大学入試を別にしても重要だ。しかし，社会に出てから，それがどれほど大切かということを考えるとき，もう一つ別な方向を考えてみる必要がある。

③　『源氏物語絵巻』を使う効果と問題点

『源氏物語絵巻』を使ったのは，物語の内容をわかりやすくするとか，具体的なイメージをもたせるとかいうはたらきもあるが，ここではもっと積極的な意味をもたせてある。すなわち，絵巻の図像を分析することによって，物語のより深い読み取りにまで指導を展開してゆくことができるのではないか，という意図である。物語をどのように描くかという点で，『源氏物語絵巻』は優れた作品であると言えるが，これを使うにあたって問題がないわけではない。一つは，この絵巻はすべてがそろっているわけではないので，使うとしても第2部，第3部ということになる点である。もう一つは，この授業でもそうだったが，物語本文を絵巻の詞書で読んでいるわけではないという点である。前者は絶望的であるとしても，後者は可能性がないわけではない。この授業の後，柏木3の詞書を教室で読んだが，ここは読めないという扱い（「女房のためこそいとをしけれ」と「よくたよひたりけり」）をすれば，十分読むことができる。

④　指導書への期待

教師は自分が大学までに学んだこと（それは，10，20年前の場合がふつうにある）をそのままに教えている可能性がなくはない。小学校の教師ほどでないにしても，現代文，古文，漢文の各分野をもたねばならないとすれば，それに近い状況にならざるをえないとも言える。現代文は，まさに「現代」（近代の意味ではなく，同時代の意味と考えたほうがいい）を対象とするからよいとして，古文と漢文は「現代」とどうきり結んでゆけるかが大事な問題になる。前述した現代語訳とは，まさに「現代」語訳でなければならないのは，そのためである。そのために，もっと熱心に作られてよいのが，各教科書会社の指導書であろう。指導書に何が求められるかと言えば，「現代」の学問（文学研究，語学研究，国語科教育など）の最新情報がまとめられていることではないか。正直なところ，現状では，指導書と生徒の学習参考書（あるいはいわゆる虎の巻）との差がどこにあるのか，という気持ちを否定できない。「教育」と「研究」とが交渉をもってゆくシステムが日本の中にない現在，せめて，その接点をもち得る場として，心ある指導書が出てくることに期待したい。

古典文学を読む (1)

猫

石井正己

『枕草子』には、一条天皇のかわいがった命婦のおとどという猫が登場し、『更級日記』には、大納言殿の姫君の生まれ変わりという猫が登場します。『徒然草』には、猫の成り上がりという猫またの話があることもよく知られています。近代になっても、夏目漱石の『吾輩は猫である』や谷崎潤一郎の『猫と庄造と二人のをんな』など、猫の登場する作品は枚挙に暇がありません。

そうした猫の中でもとりわけ忘れがたいのは、『源氏物語』の若菜上の巻に出てくる唐猫ではないでしょうか。桜の花の美しく咲く六条院で若者たちが蹴鞠したときに、大きな猫に追われて小さな唐猫が走り出し、その首綱によって御簾が引き開けられて、柏木が女三の宮をのぞき見てしまいます。女三の宮の軽率さゆえに起きたアクシデントですが、そうした状況が猫を使って実に巧みに作り出されています。

猫に首綱を付けるというのは、現代の猫の飼い方とは異なります。猫の飼い方の変化については、歴史学の黒田日出男氏に、「動物は時代のシンボル―御伽草子の世界と史実―」（『週刊朝日百科 日本の歴史別冊』一〇、一九八九年一一月）という興味深い論考があります。黒田氏は、中世まで猫がつながれ、犬が放たれていたのが、近世になってその関係が逆転した、と論じています。『猫の草子』を基軸に据えながら、絵画の史料をふんだんに活用して、中世から近世への転換を人間と動物の関わり方から説明しようとした斬新な論考です。

黒田氏は、『春日権現験記絵』（巻六―第三段）に見られるような放ち飼いの猫を例外としていますが、そう断言してよいのでしょうか。先の、唐猫をめぐる叙述に、改めて注意を払ってみたいと思います。

……唐猫のいと小さくをかしげなるを、少し大きなる猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人々おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣のおとなひ、耳かしがましき心地す。猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、逃げんとひこじろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き開けられたるを、とみに引き直す人もなし。

たいそう小さくかわいい感じの唐猫に首綱がたいそう長く付いていたが、それを何かに引っ掛けてからまったところを、少し大きな猫に追いかけられて逃げようと引っ張るうちに、御簾の横の端がたいそうあらわに引き開けられた、と書かれていて、唐猫が首綱でつながれていたことは疑う余地がありません。

しかし、この叙述には、「猫はまだよく人にもなつかぬにや」という挿入句があって、首綱が長く付いていた理由を推量しています。つなぎ飼いにしていたのは、この猫はまだよく人になついていないのだろうか、というのです。この叙述の裏を読めば、よく人になついた猫は首綱を解いた状態で飼われていたということになります。この挿入句によって、つなぎ飼いと放ち飼いという猫の飼い方の違いは、歴史的な推移だけでなく、飼う人と猫との関わりにあったことを認めないわけにゆかなくなります。後に柏木に引き取られたこの猫は、たいそうよくなついている様子であり、首綱でつながれている気配は全くありません。

そもそもこの唐猫は、「いと小さくをかしげなる」と叙述されていました。舶来の猫で、しかもかわいい感じの小猫ですから、六条院に住む女三の宮が飼うのにふさわしい猫だと見てよいのでしょう。この猫の様子は、「宮には、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなきけしきして、ひたみちに若びたまへり」（若菜上の巻）と書かれた、飼い主の女三の宮に酷似しています。女三の宮の代わりにこの猫を引き取って愛玩する柏木の思いを支えるのは、この酷似であるといえましょう。唐猫は女三の宮の分身だったのです。女三の宮は、光源氏が六条院で飼いはじめた「いと小さくをかしげなる」唐猫であった、と言っては言い過ぎでしょうか。

唐猫によって恋心を慰めようとした柏木は、それでは満足できなくなり、ついに、光源氏の留守をねらって女三の宮と密通を犯します。若い柏木と女三の宮によって、「生ける仏の御国」（初音の巻）とよばれた六条院は破壊されてしまいますが、その発端に唐猫の登場があったことは重要でしょう。唐猫が首綱によって作った御簾の横の端の透き間は、まさに六条院の亀裂だったと思われます。皮肉なことに、たいそう小さくてかわいい感じの唐猫が六条院の栄華を崩してゆくのです。

ただ一つの挿入句を根拠に、黒田氏の考察に対する若干の批判を述べながら、『源氏物語』について考えてみました。人間と動物の関わり方の変化に注目して歴史をとらえようとする方法は、今後さらに広い分野で追究されなければなりません。現代社会の中でも、人間と動物の関わり方をめぐって、新たな物語が生まれつつあります。時代が動いてゆく中で、古典や近代の文学も新たな読み変えが可能になってきています。国文学の立場から、「猫の文学史」とでもいう本をまとめてみることができたら、もう一つの歴史像を描くことができるのではないでしょうか。

（『高校クラスルーム』、1992年 6月）

『絵本源氏物語』（貴重本刊行会、1988年）

柏木は、かねて女三の宮を得られなかったことを口惜しく思い、なお恋い慕い続けていた。晩春の一日、六条院では蹴鞠の遊びが行われていたが、走り出た猫に引かれて開いた御簾の隙間に、柏木は、他に際立つ袿姿の女人を見つける。髪の美しい細く華奢なその姿は、はじめて目にする女三の宮にほかならなかった。

資料8

源氏物語

一六 さきの「あはれとだにのたまはせよ」（二八一ページ）をうけて、自分が死んではそのかいもないが、それでも、の気持。一七 病床から起きあがっている苦痛に、女三の宮を思う苦悩が加わるのであろう。一八 さきにも「これみなさるべきにこそはあらめ」と、運命的に考えていた。→二八〇ページ。一九 以前の柏木は小侍従を女三の宮の側近者と思う気持から、むだな長話にも熱がこもったのであろう。二〇「侍従が心なり。ことの外よわり給へりとみるなり」（細流抄入道説）。二一 柏木の容態。二二 柏木の乳母で、小侍従の叔母。二三「などか…」への、なかば捨てばちの応答。二四 いかに努力に努めても、やはり死は必定である、の気持をこめる。二五 回復を願う父大臣の必死の努力の及ばぬ次元で、死への道を一途に歩む柏木は、その死とひきかえに生の証としての「あはれ」の言葉を女三の宮に求める。これに背を向ける宮の返しをも「あはれ」とうけとめる無残なひたむきさであった。

一 出産の徴候。二 源氏。三「御心の中は、…思せど、…思せば、…召し、…せらるれば、…」と展開する文脈に注意。表面では当然そうあるべき処置と、その裏に抱かれている内心との矛盾葛藤とが精彩に照らし出される。四「思ひまずる方」は、実子ではないとする疑心の含まれること。五 後の蔵人である。六 以下、男子出生と聞いての、源氏の所感。また見ぬ子の顔が柏木に似ることを予想して、将来の処遇を苦慮するのである。七「いちじるし」は、顕著なさま。柏木とそっくりの顔。八 生まれた子が女子であれば、深窓に育てられ、嫁してからも夫以外の人目にはさらされないので、へんに取り沙汰されることもない。九「心やすき方」は、親に全面的に依存せずとも社会に自立しうる立場のことで、女子とは対照的な男子の場合をいう。一〇 不義の子をもたねばならぬわが運命の不思議さを思い、さらに過往の罪の回想に連なっていく。一一 藤壺と密通し、その不義の子が冷泉院であったこと。上に「わが世とともに」とあり、その罪の意識は常住不断に忘失することがない。一二 現世での応報によって来世の罪が軽減されるという考え方。『河海抄』は、『往生要集』（巻下・問答料簡・臨終ノ念相）の「有智ノ人ハ智慧ノ力ヲ以テ、能ク地獄極重ノ業ヲシテ現世ニ軽ク受ケシムルモ、愚癡ノ人ハ現世ノ軽業ヲ地獄ニ重ク受ク」を掲げる。一三「むかはる」は、自動詞で、（報いが）めぐり来る、の意。一四 女三の宮に仕える女房たち。一五 出生の真相を。一六 一品内親王で源氏の正室という立場。一七 真相を知らぬ女房たちの活気に満ちた動静を述べる。一八 ここでは、出産当日の湯殿の儀、読書、鳴弦、乳付けなど。一九 紫の上、明石の君、花散里など。二〇 →若菜上一〇一ページ注二四。ここは第三夜のそれで「御方々」の主催による。二一 食器

柏木

まひて、みづからも泣いたまふ。

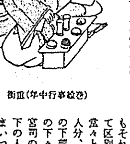
〔三〕女三の宮、男子を出産　産養の盛儀

宮はこの暮つ方より、悩ましうしたまひけるを、その御けしきと見たてまつり知りたる人々騒ぎ満ちて、大殿にも聞こえたりければ、驚きて渡りたまへり。御心の中は、「あな口惜しや。思ひまずる方なくて見たてまつらましかば、めづらしくうれしからまし」と思せど、人にはけしき漏らさじと思せば、験者など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どもの中に験あるかぎりみな参りて、加持まゐり騒ぐ。

夜一夜悩み明かさせたまひて、日さし上るほどに生まれたまひぬ。男君、と聞きたまふに、「かく忍びたる事の、あやにくにいちじるき顔つきにて、さし出でたまへらんこそ苦しかるべけれ。女こそ、何となく紛れ、あまたの人の見るものならねば安けれ」と思すに、また、「かく心苦しき疑ひまじりたるにては、心やすき方にものしたまふもいとよしかし。さてもあやしや。わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり。この世にて、かく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや」と思す。

人、はた、知らぬ事なれば、かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなんと、思ひ営み仕うまつる。

御産屋の儀式いかめしうおどろおどろし。御方々、さまざまにし出でたまふ御産養、世の常の折敷、衝重、高坏などの心ばへも、ことさらに心々にいどましさ見えつつなむ。五日の夜、中宮の御方より、子持の御前の物、女房の中にも、品々に思ひ当てたる際々、公事にいかめしうせさせたまへり。御粥、屯食五十具、所どころの饗、院の下部、庁



御皿（年中行事絵巻）

せん」と申しあげられて、ご自身もお泣きになる。

〔三〕宮はこの日の夕暮れのころから、お苦しみになったので、ご産気づきになられたのだとよく心得ている人々は、みな大騒ぎをして、大殿にもお知らせ申しあげたので、驚いてこちらへお越しになられた。お心のうちでは、「ああなんと無念なことか。疑念をさしはさむことなくてお産のお世話ができるのであったならば、どんなに珍しくもうれしくもあることだろう」とお思いになられるけれども、他人にそんなそぶりを知られてはなるまいとお思いになるので、験者衆をお呼びになり、御修法はいつとなく休まずにさせておいでになるので、僧侶たちの中でも効験のある者がすべてまいって、大騒ぎで加持に奉仕する。

夜一夜お苦しみになられて、朝日がさしのぼるころにお生まれになった。男君とお聞きになって、「このような世間に包み隠していることなのに、あいにくにも紛れもなくはっきりとした顔つきでお生まれになったら困ったことになるだろう。女の子であれば、なんとなく紛れやすいし、多くの人に姿を見せるわけではないから安心なのだが」とお思いになる一方、また、「こうした気がかりな疑念がつきまとっているのでは、世話のやけない男の子でいらっしゃるのもまったく結構なことなのだ。それにつけても不思議なことではないか。自分が行住坐臥恐ろしいと思っていたことの報いなのであろう。この世で、このような思いもよらない報いに出くわしたのだから、後生の罪もいささかは軽くなるのだろうか」とお思いになられる。

ほかの人々は、またこうした秘密は知らないことなので、このように別格のお方の御腹に、しかも晩年にお生まれになった若君へのご寵愛はたいしたものだろうと、心にかけてご奉仕申しあげる。

御産屋の儀式は、盛大で仰々しい。御方々が、さまざまの趣向でなされる御産養は、慣例の折敷、衝重、高坏などの意匠も、特別にそれぞれ競われる様子が見えるのであった。五日の夜、中宮の御もとから、御産婦の召しあがり物や、お付きの女房たちにもそれぞれの身分に相応するように配慮して区別された賜物を、公式のお祝いとして堂々とお贈りになられた。御粥、屯食五十人分、それにあちこちでの饗応は、六条院の下部や院の庁の召次所のような、すべての下々の所まで、堂々とおさせになられた。宮司の役人は、大夫をはじめとしてそれ以下の人たち、また冷泉院の殿上人もすべてまいった。

七夜は、帝から、それも公の儀式として

二八八　二八九

阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』4（小学館、1974年）

資料9

の召次所、何かの限までいかめしくせさせたまへり。宮司、大夫よりはじめて院の殿上人みな参れり。

七夜は、内裏より、それもおほやけざまなり。致仕の大臣など、心ことに仕うまつりたまふべきに、このごろは、何ごとも思されで、おほぞうの御とぶらひのみぞありける。宮たち上達部などあまた参りたまふ。おほかたのけしきも、世になきまでかしづききこえたまへど、大殿の、御心の中に心苦しと思すことありて、いたうもてはやしきこえたまはず、御遊びなどはなかりけり。

[四] 女三の宮出家を望み、源氏これを苦慮する

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬ事の恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるにつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばや、と思す。大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見た

行なわれる。致仕の大臣などが、とくに心をこめてお祝いになられるべきであるが、このごろは何事もお考えになる余裕がないので、ただ一とおりのご挨拶だけがあるのであった。親王たちや上達部などが大勢参上なさる。こうして表向きのご祝儀の有様は、世に類ないまでだいじにしてさしあげられるけれども、院はお心の中に苦しい思いを抱いていらっしゃるので、そうにぎやかにおもてなしはなさらず、管絃の御遊びなどはないのであった。

[四] 宮は、あれほどひ弱なお身体であるのに、初めてのご経験で、まったく気味がわるく、恐ろしいこととお思いになっていらっしゃって、御薬湯なども召しあがらず、わが身の情けなさを、こうしたことにつけてもつくづくと思い知らされるので、いっそこのついでにも死んでしまいたいもの、とお思いになる。大殿は、まことにうまく人前をとりつくろっていらっしゃるけれど、まだ生まれたばかりの馴染みにくい有様でいらっしゃる若君のことなどは格別にごらんになろうともなさらないなどとあっては、年老いた女房などは、「はて、なんと冷たくていらっしゃるのでしょう。珍しくお生まれになられました若君のご様子が、こんなにも恐ろしいまでにお美しくていらっしゃいますのに」と、かわいがり申すの

をのせる盆で、周囲に片木を折りめぐらしたもの。二二 折敷の下に台をつけたもの。二三 食物を盛る器で、一本脚のついたもの。二四 産養の型どおりの品々という制約内で、その趣向を競うのである。「心々」とする本も多い。二五 五夜の産養は、秋好中宮主催。二六 禄の品々を身分の差に応じて区別した細かい心づかいである。二七 中宮という公的立場で、中宮職の役人を動員しての采配ぶり。二八 以下、型どおりの饗応。二九 強飯を卵形に握り固めたもの。三〇 六条院に仕える役人たち。「庁の召次所」は、院の役所で雑用にあたる者のいる所。

一 遺漏なく細心の注意が払われる。二 中宮職。その長官が「大夫」。→野分[図]二六四ページ注二三。三 冷泉院の。四 七夜の産養は、帝の主催。女三の宮の兄にあたる帝は、父朱雀院からも姫宮への援助を依頼されているだけに、これを主催することになろう。五 源氏とのこれまでの親交から、特別の心寄せがあってしかるべきだが、後述の事情があった。六 長男柏木の重態を心痛しているゆえ。七 世間の眸を集める外面の盛儀を述べ、さらにそれと対照的な源氏の内面の苦渋に逆転していく文脈。八 源氏。九 「ひはづ」は、か細く弱々しいさま。一〇 以下、初産の難渋さをいう。一一 薬湯。汁粥とも。一二 不義の結果である男子誕生は、女三の宮を深刻な苦悩に追いこむ。一三 「さはれ、

二九〇

資料10

てまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」と、うつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめ、と恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。

夜なども、こなたには大殿籠らず、昼つ方などぞさしのぞきたまふ。源氏「世の中のはかなきを見るままに、行く末短う、もの心細くて、行ひがちになりにてはべれば、かかるほどのらうがはしき心地するにより、え参り来ぬを、いかが、御心地はさはやかに思しなりにたりや。心苦しうこそ」とて、御几帳のそばよりさしのぞきたまへり。御ぐしもたげたまひて、女三の宮「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなん思ひ

で、宮はお聞きになるともなくお耳になさって、「きっとこんなふうにしてこれからさき殿のお心隔てもまさっていくことになるのだろう」と、うらめしく、わが身の運がつらくて、いっそ尼になってしまいたい、というお気持になられた。

院は、夜なども宮のもとではおやすみにならないで、昼間などにちょっと顔をお出しになる。「世の中のはかない有様を見知るにつけ、わたしも行く先短くなにかと心細い気持になって、仏前のお勤めばかりするようになりましたので、こうしたざわついた折は、気持をかき乱されるように思われまして、とてもお伺いできずにおりますが、いかがですか、ご気分はさわやかにおなりになったでしょうか。おいたわしいことです」と言って、御几帳の端から、おのぞきになられた。お顔をおあげになって、「やはりもう、とても助からないような気持がいたしますが、こうしたことで死ぬ人は罪も重いと申します。尼となって、もしかしたらそれによって命をとりとめられるものかもしれないので試してみたいと存じますし、また亡くなったとしても罪をなくすことにもなろうかと存じております」と、いつものご様子とくらべてまったく大人びて申しあげられるのを、「なんといやな、とんでもない御事です。どうして、それほ

…」で、なかば捨てばちの語気。一四 このあたり、源氏と女三の宮のそれぞれ深い苦悩に貫かれつつ、しかも交流のない内面を交互に叙述。一五 「人にはけしき漏らさじ」(二八八ページ)と思うだけに、外面の装いを盛りあげている。一六 生まれてまもない赤子に特有の、気味わるい表情をいう。その時期が過ぎてからと思う裏に、素直に喜べない気持がひそんでいる。一七 宮付きの、老齢の女房。一八 源氏が若君に冷淡であると非難する。一九 さきの女房の発言「かくこととなる…」(二八九ページ)と同質の内容。二〇 「さ」は、源氏の「おろそかに」な処遇をさす。それを「のみこそは」と強調し、将来の源氏の隔心は必定と推し量る。二一 出家の決意、というよりは、理性をこえた衝動。二二 以下、源氏の女三の宮への疎隔をいう。二三 勤行に精励する者にとっては、出産にまつわる諸事が乱雑なものにしか思われない、とする。二四 右のような無沙汰の理由を述べ、次に見舞いの言葉に転ずるが、いかにもしらじらしい。二五 さきの「昼つ方などぞさしのぞきたまふ」とともに、源氏の隔心の現われ。二六 生きる勇気を取り戻そうとしたが、やはり、の気持。二七 出産で死ぬ者の罪が重いとするのは、当時の考え方。二八 出家の功徳で延命を願う気持。二九 出産で死ぬという罪が、死ぬ前に出家したことの功徳で救われる、とする。

二九一

はべる」と、常の御けはひよりはいと大人びて聞こえたまふを、源氏「いとうたて、ゆゆしき御ことなり。などてかさまでは思す。かかる事は、さのみこそ恐ろしかむなれど、さてながらへぬわざならばこそあらめ」と聞こえたまふ。

御心の中には、「まことに、さも思しよりてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなんかし。かつ見つつも、事にふれて心おかれたまはんが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすまじう、うき事のうちまじりぬべきを、おのづからおろかに人の見とがむることもあらんが、いといとほしう、院などの聞こしめさんことも、わがおこたりにのみこそはならめ。御悩みにことつけて、さもやなしたてまつりてまし」など思しよれど、また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさんことも心苦しければ、源氏「なほ、強く思しなれ。けしうはおはせじ。限りと見ゆる人も、たひらかなる例近ければ、さすがに頼みある世に

どまでにお考えになるのですか。こうしたお産などということは、そのように恐ろしいことではあるのでしょうが、それだからといって助からないものであるというのなら話は別ですが、そんなことはないのですから」と申しあげられる。

お心のうちでは、「ほんとうに、そうもご決意になられておっしゃるのなら、そのお望みどおりにしてお世話してあげれば、それが思いやりの深さということになるのだろう。一方でこうして連れ添っていながらも、何かにつけて、つい他人行儀なお心でいらっしゃるとしたらおいたわしいことであり、また自分でも気持が元どおりにおさまるとはとても思えないし、いやな仕打ちに出てしまうこともあろうから、しぜん宮に対して疎略にお扱いをしていると人から見とがめられることもあるだろう。とするとそれがじつにつらいことだし、院などのお耳にはいった場合にも、すべてこの自分の落度ということになるであろう。ご病気にかこつけて、お望みどおり尼にしてさしあげることにしようか」などとお考えにもなられるのだが、それもまたあまりにもったいなくおかわいそうで、これほどふさふさと長い御髪の生いさきを、そのように尼そぎに切りすててしまうことも心が痛むので、「そんなことはおっしゃらないで、

一 長い間の苛酷な苦悩の果てに、いま女三の宮は、正常ではなくなっている。さきの「わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ」とともに注意すべきである。『湖月抄』が「女三はつねはかやうには、きと物のたまふ事はなきなるべし」と解するのは卓見。二 女三の宮が、生きがたい、とか、たとえ死んでも、とか言ったことについて。三 出産をさす。四 「恐ろしかなれど」とする本も多い。五 「さて」は、「かかる事は、さのみこそ恐ろしかむなれど」をうける。六 源氏は、女三の宮に対して表面では強く諫止する態度を示しながらも、心中ではむしろ出家を容認しようとする。七 宮を出家の人として、以後の世話をする、の意。八 宮への気持を改めようとして、改められない、の気持。九 自分にはそうするつもりはなくとも、宮へのつらい仕打ちが自然と出てくる、とする。「うき事」とする本が多い。一〇 当然ながら朱雀院の思惑が顧みられる。源氏の薄情の噂がすぐに伝わり、源氏は院を裏切ったことになる。一一 「のみこそは」の語調に注意。源氏ひとりだけに責任が問われる。一二 産後の病気。一三 宮の出家によって、このままでは収拾がつかなくなるであろう破綻を、修復できる、の気持。一四 目前の宮をあらためて見直すと、出家への同意が、ためらわれる。一五 出家させてしまおうかという考えに背反し

二九二

資料11

なん」など聞こえたまひて、御湯まゐりたまふ。いといたう青み痩せて、あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま、おほどきうつくしげなれば、いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御ありさまかなと見たてまつりたまふ。

[五] 朱雀院、憂慮して下山 女三の宮出家する

山の帝は、めづらしき御事たひらかなりと聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かく悩みたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。

さばかり弱りたまへる人の物を聞こしめさで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて、年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院のいと恋しくおぼえたまふを、女三の宮「またも見たてまつらずなりぬるにや」といたう泣いたまふ。かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ、いとたへがたう悲しと思して、あるまじき事とは思しめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

気持を強くお持ちなさいまし。ご心配になられることはございません。もうこれきりと思われる病人でも、快くなった例が近々にあるのですから、やはり世の中はすてたものではありません」などと申しあげられて、御薬湯をさしあげられる。ほんとにひどく青み痩せて、いいようもなく頼りなげなご様子で臥していらっしゃるお姿は、おっとりしてかわいらしく見えるので、どんなにひどい過ちがあったにせよ、気が弱くなって許してあげたくなるようなご風情である、と拝されるのである。

[五] 山の帝は、初めてのご出産が平安におすみになったとお聞きあそばされて、しみじみと心からお会いになりたくおぼしめすが、こうしてずっとお煩いになっていらっしゃるというお報せばかりあるので、「どうおなりになられるのだろうか」と、仏のお勤めも乱れてご心配あそばす。

あれほどにお弱りになられたお方が、何も召しあがらないで何日もお過ごしになったので、まったく衰弱しておしまいになって、これまでの長年お目にかからなかった間よりも、院がとても恋しく思われなさるので、「もう二度とお目にかかれなくなってしまうのだろうか」とひどくお泣きになる。このように申しあげられる事情を、しかるべき人から院に申しあげさせられたの

て生起する、疑団と執着。一六 髪が豊かで長いことに、若く生い先長い人生の意をこめた。一七 断髪して僧衣に身をやつさねばならぬことへのいとおしさ。一八 宮の出家に同意しつつも哀惜する気持が、生きる勇気を…の言葉となる。さきの直話から逆接するが、その言葉を交える内心は複雑。一九 危機を乗りきった紫の上の例。二〇 いかに無常の世とはいえども、の気持。二一 女三の宮をあえかに病む他人として捉えなおし、対する源氏の執着をも語っている。二二 「御さま」とする本が多い。十 男子出産に現世の応報を観念し、産養の盛儀を沈鬱にうけとめる源氏の心は、表面をとりつくろういかなる努力もこれを蔽いきれない。女三の宮の絶望と恐れは決定的である。宮の発心は、柏木の死への歩みと並行して、それしかありえぬ道であった。それを言葉ではおしとどめる源氏の複雑な内心。物語の進行が掘り起こす世界は酷薄である。二三 朱雀院のこと。二四 女三の宮の出産をさす。二五 男子誕生の報せを感動的にうけとめたのである。二六 産後の病気。それが「のみ」とあるだけに、院の心配をつのらせる。二七 女三の宮に対する心配のため仏道に精進できない。二八 以下、宮の容態と心情を叙述。二九 昨年末の朱雀院五十の賀に、降嫁以来はじめて対面した。「年ごろ」は、その対面までの七年間をいう。三〇 対面後はかえって父院を恋しく思うようになった。

二九三

三「かくは」上の「またも…なりぬるにや」の内容をさすか。一説には出家の意思とも。「聞こえたまふ」は、女三の宮が源氏に。四 世間を捨てて出家した者が、肉親への執着から俗界に出てくることを「あるまじき事」とする。五 人目を憚って。「世に」とする読み方もある。『河海抄』は、延長八年九月二十八日、宇多法皇が病臥の醍醐天皇を見舞い加持をしたとある『吏部王記』の記事を掲げ準拠とみる。

一 源氏。二 娘を思う院の気持にいまさらのごとく驚きながらも、密通事件の不幸を思うのである。三「なほ」に、現世を捨てようとして捨てきれぬ気持をこめる。四「まどひ」は、次の引歌の表現とひびきあう。五「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰・雑一 藤原兼輔）。六 さきの「御行ひも乱れて思しけり」に呼応。七 道理に反して、子である女三の宮が親の院よりも先に死ぬことになったら、の意。八 朱雀院も女三の宮も、会わずに死別したことを恨み、その妄執は永劫に続くであろう、とする。九 さきの「あるまじき事とは…」に呼応。一〇 出家という点で異なる。一一 人間らしさと昔ながらの懐かしさを感ずる。一二 人目を避けるべく、粗末な装いであった。一三 法皇らしからぬ服装で、一般の僧侶と等しく墨染の衣をまとっている。一四 以前から出家を切望する源氏だからであろ

かねてさる御消息もなくて、にはかに、かく、渡りおはしまいたれば、主の院驚きかしこまりきこえたまふ。朱雀院「世の中を、かへり見すまじう思ひはべりしかど、なほ、まどひさめがたきものはこの道の闇になんはべりければ、行ひも懈怠して、もし後れ先だつ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみに残らむとあぢきなさに、この世の譏りをば知らで、かくものしはべる」と聞こえたまふ。御容貌異にても、なまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき御法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。例の、まづ涙落したまふ。源氏「わづらひたまふ御さま、ことなる御悩みにもはべらず、ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに、はかばかしう物などもまゐらぬつもりにや、かくものしたまふにこそ」など聞こえたまふ。源氏「かたはらいたき御座なれども」とて、御褥の前に、御

で、院はまったくこらえきれないほど悲しいお気持になられて、出家の御身にあるまじきこととはおぼしめしながら、夜の闇に紛れて山をお出ましになられた。

前もってこうとお便りもなくて、急に、このようにお越しになられたので、主の院は驚いて恐縮申しあげられる。「この俗世のことは心にかけまいと思っておりましたのですが、なんといっても、煩悩を捨てきれないのは、子を思う道の闇というものでございますから、勤行も怠りがちで、もしも親子の順序どおりにならないで、後の者が先だって別れるということになれば、そのままこの恨みもお互いに残ろうかと思うと、それが情けなくて、世の人から非難をうけるのもかまわず、このようにやってまいったのでございます」と申しあげられる。お姿は僧形でありながら、優雅にやさしい風情で、目だたぬよう身なりをやつしていらっしゃって、ちゃんとした御法服ではなく、墨染のお姿の申しぶんないと思われるほど気品高く美しくお見えになるのも、うらやましいお気持で拝される。例のこと、ながらまず涙を流される。「煩っていらっしゃるご容態は、格別にどうというご病気なのでもございません。ただこの幾月もの間お弱りになっていらっしゃるご様子であるところへ、さっぱりお食事なども召しあ

う。一五 宮様よりもさきに涙がこぼれる。一六 出産に原因する病気以外の何ものでもない。一七 出産前後の数か月。一八 以下、急の来訪に恐縮した源氏の、丁重な饗応。一九 女三の宮と対面させるべく、その御帳の前に招じた。二〇 御帳台から板敷の上におろす。「床」―若菜下二一四ページ注一六。二一 夜通し加持祈禱する僧侶。二二 墨染をまとって病人の寝所に近侍した自分をこのように言った。二三 姿は僧侶のようでも、その実、功徳も積まず験力もない自分であることを言う。二四 僧侶ではなく、一個の父親として女三の宮に対する気持である。二五「も」に注意。娘を思う父院の真実に接して、宮の心にも悲しみがこみあげてくる。二六 源氏への言葉。「なほ、え生きたるまじき心地…」（二九一ページ）と同様、生きられぬ気持から出家を哀訴する。二七 法皇の父院を師僧として導かれるのを最良と考え、今日が出家の絶好の機会と思う。二八 院は、僧の立場からは女三の宮の出家の希望を推称せざるをえない。二九 前述を逆接でうけとめ、死病とは決めがたいとして、父親の立場から出家をおしとどめる気持をこめる。三〇「ありぬべき…憚りぬべきなど」は、定家本・明融本では「ありぬべきなんど」とある。大島本では「ありぬべきなど」とある。それ以外は採用本文に近い形をとっている。三一 さきの「さすがに」とも呼応して、出家の許諾をためらう気持をくり返す。三二 源氏。三三「進み」で、女三

褥まゐりて入れたてまつりたまふ。宮をも、とかう人々つくろひきこえて、床の下におろしたてまつる。御几帳すこし押しやらせたまひて、朱雀院「夜居の加持の僧などの心地すれど、まだ験つくばかりの行ひにもあらねばかたはらいたけれど、ただ、おぼつかなくおぼえたまふらんさまを、さながら見たまふべきなり」とて、御目おし拭はせたまふ。宮も、いと弱げに泣いたまひて、女三の宮「生くべうもおぼえはべらぬを、かくおはしまいたるついでに、尼になさせたまひてよ」と聞こえたまふ。朱雀院「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりて事の乱れあり、世の人に譏らるるやうありぬべきことになん、なほ憚りぬべき」などのたまはせて、大殿の君に、朱雀院「かくなん進みのたまふを、今は限りのさまならば、片時のほどにても、その助けあるべきさまにて、となん思ひたまふる」とのたまへば、源氏「日ごろもかくなんのたまへど、邪気なんど

がらないことが続いたため、でしょうか、このようにおなりになりましたのです」などと申しあげられる。

「お恥ずかしいお席ではございますが」と言って、御帳台の前に御褥をととのえてご案内申しあげられる。宮をも、あれこれと女房たちが身づくろいをおさせ申して、御帳台の下におろしてさしあげる。御几帳を少し押しのけられて、「夜居の加持の僧などのような感じがしますけれども、まだ効験の現われるほどの修行もしていないので、見苦しいのですが、ただあなたが会いたがっておいでになるわたしの姿を、目のあたりよくごらんになるがよい」とおっしゃって、御目をお拭いになられる。宮も、ほんとに力なげにお泣きになって、「生きられそうにも思われませんので、こうしてお越しあそばされた機会に、私を尼にさせてくださいまし」と申しあげられる。「そのようなご本意があるのならまことに尊いことですが、やはり、望みがないときまっているわけではない寿命なのだし、これからさき人生の長い人は、かえって後から面倒なことが起こって、世の人の非難をうけるようなことがありがちなのですから、まあお見合わせになるほうがよろしいでしょう」などとおっしゃられて、大殿の君に、「このようにご自分から望んでおっしゃるので

の宮の切実な発心とみている。三四 宮の容態を確かめて、その処置を考えようとする。三五「出家の功徳、後世のたすけと成べき欤」（細流抄・三光院実枝説）。三六 物の怪ゆえの、一時的な発心かもしれないとする。

一「かかる方に」とする本が多い。二「なる」は伝聞の意。世間にありがちなこととして、一般化した言い方。三 源氏は内心では女三の宮の出家に同意もした（二九一ページ）が、無視しつづけてきたとするここでの発言の裏には、朱雀院への思惑がひそむ。四 たとえ物の怪が言わせている出家の希望だからとて、それに同意して悪いことはなかろう、と源氏の意見をおし返す。朱雀院は、女三の宮の願を、父親としてせつなくうけとめている。五 女三の宮の万が一の死を懸念していう。六 源氏との対話から心中叙述に転じて、以下、源氏への不満を思う。「御心の中に」「御心の中には」とする本もある。七 源氏が朱雀院の依頼を快諾して女三の宮を降嫁させたこと。―若菜上（一〇）。八 宮に対する源氏の疎略な扱い方。今はじめて知ったのではなく、後に「年ごろ」とあり、側近の者を介して宮の処遇が報じられてきたのであろう。―若菜下（三）。九「思ひつむ」（深く恨みに思う）の尊敬表現。一〇 源氏と女三の宮の夫婦仲を諦めている気持から、どうせ離れるならば今の機会に出家させるのが最良の策と考える。一一「何かは」は、次行さ

の人の心たぶろかして、かかる方にてすすむるやうもはべなるをとて、聞きも入れはべらぬなり」と聞こえたまふ。朱雀院「物の怪の教にても、それに負けぬとて、あしかるべきことならばこそ憚らめ、弱りにたる人の、限りとてものしたまはんことを聞き過ぐさむは、後の悔心苦しうや」とのたまふ。

御心の中、「限りなううしろやすく譲りおきし御事を承けとりたまひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御気色を、事にふれつつ、年ごろ聞こしめし思しつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらんところも口惜しう思しわたるに、かかるをりにもて離れなんも、何かは、人わらへに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらん。おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりししるしには思ひなして、憎げに背くさまにはあらずとも、御処分に、

すが、これで助かりそうもないという容態というのであれば、わずか一時の間でも、その功徳があるようにしてやりたいと存じます」と仰せられるので、「この何日か、そのようにおっしゃるのですが、物の怪などが人の心を迷わして、こういう考えを起こさせるということもございますから、と申して取りあげもしなかったのでございます」と申しあげられる。「物の怪の勧めであっても、それに負けたからといって悪いときまっていることならば、さし控えもしましょうが、弱ってしまった人がもうこれきりと思って願っていらっしゃることを聞き流してしまうのでは、後になってから悔やまれ、つらい思いにもなるのではないでしょうか」とおっしゃる。

お心のうちでは、「このうえもなく安心に思って任せた宮のお世話をご承諾になっておきながら、それほどたいして情愛をそそぐではなく、自分が最初期待したようではないご様子であるということを、何かの折にふれて、年来お耳にいれて心を痛めておられたが、そのことを表に出してお恨み申しあげられるべきでもないので、世の人が想像して噂をたてている点も、残念なこととお思いつづけになられて、こうした機会にこの世を離れるのも、もの笑いになるような夫婦関係を倦んでの出家というふう

もあらざらん」にかかる。一二「よのつねの時出家などし給ひては猶へ違猶めかん所外聞いかゞなるに、よき時節とおぼすなり」（細流抄）。一三 夫婦仲を断った出家後も、源氏は女三の宮の日常の世話はみてくれるだろう、の予測。一四「思ひなす」は、自らを納得させる気持。源氏のこれからの後見を考えることによって、今まで預けがいがあったと、しいて思いこもうとする。一五 出家して住まいを異にしては源氏の疎略に面当てがましくもあるが、病気ゆえの出家とあらば、そうも受けとられまい、とする判断がある。一六 父桐壺院からの伝領として。出家後もそのまま放置していたか。三条の邸である。一七「思ひとる」の尊敬表現。思慮分別の果てに選びとられた結論である。一八 女三の宮の「…かくおはしまいたるついでに、…」（二九五ページ）に応ずる気持。一九 受戒。―若菜下二三二ページ。二〇 女三の宮と自分がともに仏縁に結ばれるという連帯感さえあろう。二一 源氏。二二 不義密通事件。それゆえに女三の宮の出家を良策とも思ったが、ここでのにわかな決定に源氏は狼狽する。二三 宮への未練と不調さがはね返ってくる。二四 宮のいる御帳の内に。以下、源氏が朱雀院に対してでなく、もっぱら宮に言いかける点に注意。宮への言葉に院への思惑もこもっている。二五 さきに反対したときの「なほ、強く思しなれ」（二九一ページ）に類似。二六 まずは身体の回復が先決で、出家はそ

広くおもしろき宮賜はりたまへるを繕ひて住ませたてまつらん。わがおはします世に、さる方にても、うしろめたからず聞きおき、また、かの大殿も、さ言ふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ。その心ばへをも見はてん」と思ほしとりて、朱雀院「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはんをだに結縁にせんかし」とのたまはす。

大殿の君、憂しと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ、えたへたまはず、内に入りて、源氏「などか、いくばくもはべるまじき身をふり棄てて、かうは思しなりにける。なほ、しばし心を静めたまひて、御湯まゐり、物などをも聞こしめせ。尊きことなりとも、御身弱うては行ひもしたまひてんや。かつはつくろひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふ、と思したり。つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや、と見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。

には見えないのであったら、どうしてそれもわるいことがあろうか。一とおりの後見としては、やはりこれからも頼りになれそうなご様子なのだから、ただそのことをお預け申しておいたかいがあったと思うこととして、あてつけがましくそむくという体ではないようにしてでも、御形見分けに広く趣のあるお邸を拝領しているのに手入れをして、あそこにお住まいになるようにしてさしあげよう。自分がこの世に生きている間に、尼の生活ではあっても、気がかりのないようにしておきたいし、またこの大殿にしても、そうはいってもまったく薄情にはまさかお見捨てになることはあるまい。そのお心持ちをも見とどけることにしよう」とお考えをお決めになられて、「それでは、こうしてやってまいりました機会に、せめて戒なりとお受けになられて、仏とのご縁を結ぶことにいたしましょう」と仰せられる。

大殿の君は、憎くお思いになるお気持も忘れて、これはいったいどうしたことかと、悲しくも残念にも思われるので、とてもこらえることがおできにならず、御几帳の内にはいって、「どういうわけで、この余生いくばくもありませぬわたしを振り捨てて、こうしたお気持になられたのですか。やはり、もうしばらく気持を落ち着けなさって、

れからでもおそくはない、とする。 三「親の中給ふことをうけ給はぬなり。結句あしくの給とおぼす也」(細江入楚)。 云「女三宮のつれなきやうにて、源氏を心に恨給ふ心ある也」(弄花抄)。 云 宮への不関さ。

一 源氏は内心では女三の宮の出家が良策と思うだけに躊躇する。 二 もともと「世に隠れて」の御幸であった。 三 出家から宮に奉仕している加持祈禱の僧。 四 院が受戒のための僧を選んで、宮の御帳中に招き入れる。 五 上の「御髪おろさせたまふ」を、あらためて細述する。 六 さきの「悲しく口惜し」「いとほしうあはれ」の気持がきわまる。 七「かくても」は、「この世にはかひなきやうに」をうけて、せめて出家生活では平安の日々を送ってほしい、の気持。 八 出家したうえは、来世の救済に期待して仏道に精励しなさいと、僧と父親との立場から言う。 九「朱雀の御帰寺の躰なり。あはれなるさまなるべし」(細江入楚)。 一〇 受戒の後も。 一一 女三の宮は、父院と心を割った対面もせずに別れねばならぬと思うと、挨拶もろくにできない。 一二 朱雀院の突然の御幸と宮の急な出家に接しての感想。 一三 出家前の朱雀院が六条院に御幸した。→藤裏葉(三)[二]。 一四 こちらから西山に出向いて、あらためてお礼をする。 一五 朱雀院を西山に送るべく、その行列を源氏のほうで整える。 一六 以下、かつて朱雀院が源氏に女三の宮を降嫁させる

とかく聞こえ返さひ思しやすらふほどに、夜明け方になりぬ。帰り入らんに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈禱にさぶらふ中に、やむごとなう尊きかぎり召し入れて、御髪おろさせたまふ。いとさかりにきよらなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院、はた、もとより、とり分きてやむごとなく、人よりもすぐれて見たてまつらんと思ししを、この世にはかひなきやうになしたてまつるも飽かず悲しければ、うちしほたれたまふ。

朱雀院「かくても、たひらかにて、同じうは念誦をも勤めたまへ」と聞こえおきたまひて、明けはてぬるに急ぎて出でさせたまひぬ。

宮は、なほ弱う消え入るやうにしたまひて、はかばかしうもえ見たてまつらず、ものなども聞こえたまはず。大殿も、「夢のやうに思ひたまへ乱るる心まどひに、かう昔おぼえた

御粥湯を召され、何か食べ物をおあがりなさいまし。いくら尊いことであっても、お身体が弱っていては、お勤めもおできになれましょうか。とにかくご養生をなさってからのことに」と申しあげられるが、宮は頭を振って、「なんとつらいことをおっしゃる」とお思いになられる。「表にはお出しにならないで、内心うらめしいとお思いになることもあったのだろうか」と、お察しになられると、いじらしくかわいそうになる。

あれこれと申しあげて反対し、ぐずぐずためらっていらっしゃるうちに、夜も明け方になってしまった。山にお帰りになるのに、その道中も昼間では具合がわるいだろうと、お急がせになって、御祈禱のために宮にお仕えしている僧の中で、身分高く徳のある者ばかりをお呼び入れになって、御髪をおろさせなさる。今が盛りの気品高く美しい御髪をそぎ捨てて、戒をお受けになる儀式が、悲しくも残念にも思われるので、大殿はとてもこらえられぬお気持になられてひどくお泣きになられる。院もまた、もとよりとりわけだいじになさって、誰よりもしあわせになるようにしてあげようとのおぼしめしであったのを、この世ではそのかいもない尼姿にしてさしあげるのも、いいようもなく悲しく感じられて、涙に濡れ

べく、「今日か明日かとおぼえはべりつつ、…」「また思ひゆづる人なきをば、…」(若菜上四〇・四一ペ) などと言った言葉をさす。 一七 この言葉、朱雀院自身には他意のない本心からであるとしても、源氏には痛烈な皮肉としてうけとめられよう。 一八「言ひつけ」の尊敬表現。源氏の意向とは無関係に押しつけた、とする。 一九 さきに「ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして」(二九六ペ)の気持に対応した発言。 二〇 女三の宮の発心が「生くべうも思われぬ状態によるだけに、命をとりとめて生きながらえた場合を考慮する。 二一「あまたになり給て此院にすみ給ふべき事もいかゞ也。又今さら山里などに住給ふべきにもあらずと也」(細流抄)。このあたりは、さきの「御処分に、…譲りて住ませたてまつらん」に対応。 二二 いくらかたい決意とはいえ、の気持。 二三「さま」は、尼の身の上。「是はちと朱雀も下心のある仰の躰也」(扱江入楚)。さきの「さ言ふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ」(二九七ペ)に対応。 二四「なほ」で、四行前の「年ごろは心やすく思ひ…」をよびおこす気持。 二五「ましうなんど」とする本も多い。 二六 詳しく仰せられるほうが、そうでないよりもかえって、の意。 二七 さきの「夢のやうに思ひたまへ乱るる心まどひ」をくり返す気持。「朱雀の御心中を尤と察してかやうに申給ふにや。女三の御ひがごとをしり給はで、朱雀のおぼすは御理りなるべし」

る御幸のかしこまりをも、え御覧ぜられぬらうがはしさは、ことさらに参りはんべりてなん」と聞こえたまふ。御送りに人々参らせたまふ。朱雀院「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはんことのあはれに避りがたうおぼえはべりしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞こえつけて、年ごろは心やすく思ひたまへつるを、もしも生きとまりはべらば、さま異に変りて、人繁き住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむありさまも、また、さすがに心細かるべくや。さまに従ひて、なほ、思し放つまじく」など聞こえたまへば、源氏「さらに、かくまで仰せらるるなん、かへりて恥づかしう思ひたまへらるる。乱り心地とかく乱れはべりて、何ごともえわきまへはべらず」とて、げにいとたへがたげに思したり。

ておいでになる。「こんなお姿になられても、どうぞご無事で、どうせなら念誦をもお勤めになられるように」とお言葉をお残しになって、夜が明けてしまったので急いでお立ちになられた。

宮は、まだやはり弱々しく消え入るようになさって、はっきりと父院を拝することもできず、とてもご挨拶など申しあげられない。大殿も、「夢のような心地でとり乱しておりまして、こうした昔なつかしく思われます御幸の御礼をもごらんになっていただけないご無礼は、のちにあらためて参上いたしまして」と申しあげられる。御送りにお供の人々をまいらせられる。「この世での私の命も今日か明日かと思われましたころに、あとに残された宮がほかに後見する人もなくさまようことになるのだろうと、そのことがかわいそうでこの世を捨てがたく思われましたので、あなたのほうではご本意ではなかったのでしょうが、このようにお世話をお頼み申してこの年月安心しておりましたのですが、もしも宮が命をとりとめることになりましたなら、尼姿では人の出入りの多い住まいはふさわしくないでしょうし、それかといってしかるべき山里などに離れて住むのも、これまたなんといっても心細いことでしょう。尼の身は尼の身でいつまでもお見捨てになられませ

(扱江入楚)。 十 女三の宮の将来を案じ、最良の道として源氏に降嫁させた朱雀院は、そのために不幸に沈淪することになった彼女を、悲痛にもわが手で出家させるほかなかった。この結末を、拱手受動的にうけとらせられる源氏の威厳はもはや形骸化している。

一「後夜」は、六時(若菜上二八九ペ注三)の勤行の一つで、夜中から夜明けまで行なわれる。 二 朱雀院帰還後まもなく、受戒の効あってか、物の怪が女三の宮の身体から離れる。 三 発話の言い方。 四 源氏が紫の上から物の怪を退散させたことをいう。したがって六条御息所の死霊であることがわかる。 五 ここでも紫の上に親密な源氏を恨み妬む。 六「栄花物語に、小一条院女御(顕光公女)の物気にて、御堂(道長)御女ひさしくわづらひ給て、ついで御ぐしおろさせ給ふ、その時邪気人につきて、いまこそうれしけれとて手をうちてわらひくるふよしみえたり。此事歟」(河海抄)。 七 以下、物の怪の執念の深さに、あらためて戦慄をおぼえる。 八 女三の宮の発心が物の怪ゆえかと思うと、その出家に新たな感慨がわく。 九「頼みがたげに見え…」とする本が多い。 一〇 源氏と同様に。このあたり、源氏と女房たちの気持が重なり、文末は源氏のそれとして「せさせたまふ」としめくくられる。 一一 今までのような華やかな女君でなくなる尼姿をいう。 一二 朱

〔六〕六条御息所の物の怪、また も現われる

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、物の怪「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。宮、すこし生き出でたまふやうなれど、なほ頼みがたげにのみ見えたまふ。さぶらふ人々も、いと言ふかひなうおぼゆれど、かうてもたひらかにだにおはしまさば、と念じつつ、御修法、また延べて、たゆみなく行はせなど、よろづにせさせたまふ。

〔七〕柏木、夕霧に告白、後事を託して死去する

かの衛門督は、かかる御事を聞きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少なうなりたまひにたり。女宮のあはれにおぼえたまへば、ここに渡りたまはんことは、今さら

んで」などと申しあげられるので、「重ね重ねこうまで仰せられますと、かえって恥じいる思いでございます。気持がすっかり動転してしまいまして、もう何をどうしてよいのか分別がつきかねるのでございます」と言って、いかにもこらえられそうもない御思いでいらっしゃる。

〔六〕後夜の御加持に、御物の怪が現われてきて、「それごらんなさい。まったくうまく取り返したと、お一人については思っておいでだったのが、とても憎らしかったので、このあたりにさりげなくやってきて、この数日とりついていたのです。もう立ち去ることにします」と言って笑う。事の意外さにまったく驚いて、「さては、この物の怪がこの宮にも離れずにいたのであろうか」とお気づきになると、宮がいじらしくもあり、また後悔もされる。宮は、少し元気を取り戻されたようであるが、それでもやはり頼りなさそうにお見えになるばかりである。おそばにお仕えする人たちもすっかり気落ちした思いであるけれども、このようなお姿でも、せめてご無事でいらっしゃるのであったらと、つらさをこらえては御修法をさらにくり延べて、怠りなく勤めさせるなど万事に手をお尽くしになられる。

〔七〕あの衛門督は、このような御事をお聞きになると、ますます消え入るようになさ

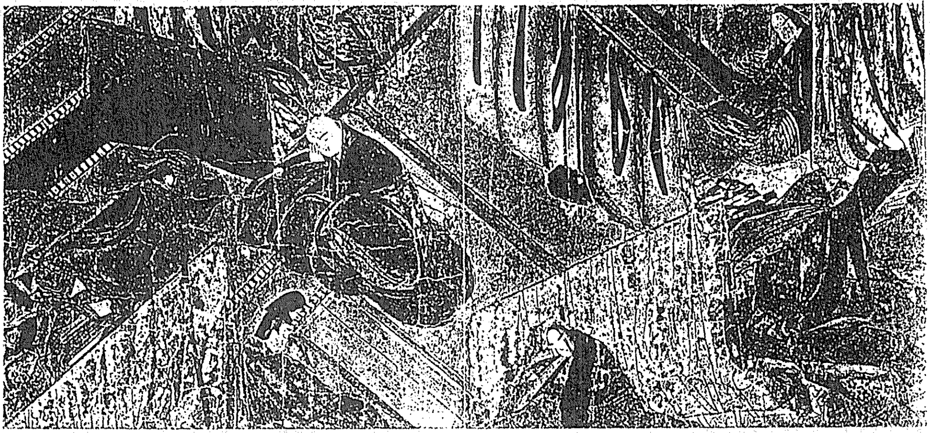
雀院の言った「かくても、たひらかにて」に近似した表現。 十 女三の宮の出家は、源氏の妻室としてわが罪過を恐れおののく存在からの転身であったが、それが物の怪の取りつく異常な病状によって促進されたのである。この段の物の怪出現は、その経緯の種明かしでもあるが、同時に源氏の人生・権勢を、現実の外側から、あるいは根底から相対化する意味あいがあろう。 一三 柏木。 一四 女三の宮の出家。 一五 女三の宮が「なほ弱う消え入るやうに」(二九八ペ)とあったのに似た表現。 一六 北の方の落葉の宮。臨終の際に対面すべく約束していた(若菜下二七三ペ)が、いよいよ最期の時と思うのである。 一七 父大臣の邸。落葉の宮の来邸は、その皇女という身分から考えられない、とする。 一八「やうにもあらむを」または「やうに」という異文がある。 一九 どんな状況であれ、落葉の宮が不用意に人目にさらされるのは不都合である、とする。 二〇 自分(柏木)が落葉の宮のもとへ。 二一 最後の対面。 二二 柏木の両親が。 二三 対面さえかなわぬ死別だと思う柏木は、落葉の宮への後援を周囲に依頼する。 二四 以下、落葉の宮の、柏木への降嫁の経緯が、ここで初めて明らかにされる。 二五 落葉の宮の母。 二六 致仕の大臣の懇願による。「ゐたち」は、すわったり立ったりで、懇請のさま。柏木自身は、「思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて」(若菜下二〇八ペ)とある

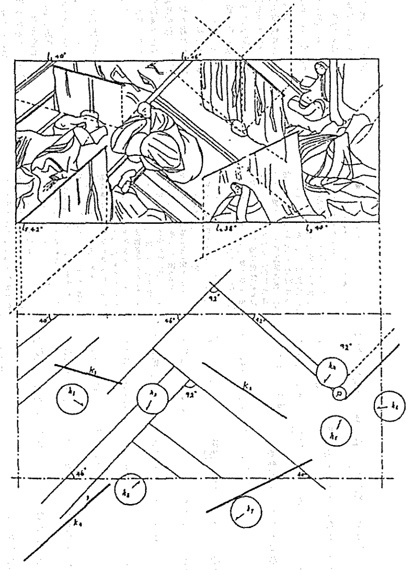
に、軽々しきやうにあらんを、上も大臣も、かく、つとそひおはすれば、おのづからとりはづして、見たてまつりたまふやうもあらむにあぢきなしと思して、柏木「かの宮に、とかくしていま一たび参うでん」とのたまふを、さらにゆるしきこえたまはず。

誰にも、この宮の御ことを聞こえつけたまふ。はじめより、母御息所はをさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣のゐたちねむごろに聞こえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にも、いかがはせんと思しゆるしけるを、二品の宮の御こと思ほし乱れけるついでに、朱雀院「なかなか、この宮は、行く先うしろやすく、まめやかなる後見まうけたまへり」とのたまはすと聞きたまひしを、かたじけなう思ひ出づ。柏木「かくて見棄てたてまつりぬるなめり、と思ふにつけては、さまざまにいとほしけれど、心より外なる命なれば、たへぬ契り恨めしうて、思し嘆かれんが心苦しきこと。御心ざしあ

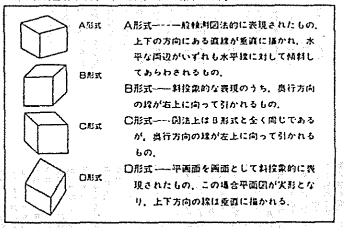
って、まるで回復の見込みも少なくなってしまわれた。北の方の女宮をかわいそうにお思いになるので、「ここにお越し願うのはご身分柄いまさら軽々しいように思われるし、母上も父大臣も、こうしておそばに付ききりでいらっしゃるのだから、しぜんに何かのはずみでお姿をごらんになるようなことでもあっては、それも困る」とお思いになって、「あちらの宮に、どうぞしてもう一度うかがいたい」とおっしゃるのだが、どうしてもお許しにはなられない。

どなたにも、この宮の御事をお頼みになられる。初めから、母の御息所はあまりお気が進まれなかったのであるが、この父大臣が奔走して熱心にお望み申されたので、その気持の深さにお負けになって、院もいたしかたないとおぼしめされてお許しになったのであるが、二品の宮の御事にあれこれとお心をお痛めになられた折に、「かえってこの二の宮は、行く末も安心のできる、しっかりした後見をお持ちになった」と仰せられたとうかがったことを、畏れ多いことに思い起こすのである。「こうして後にお残し申しあげることになるのだろうと思うにつけて、いろいろとおいたわしいのですが、思いのままにならないのが命なのですから、全うすることのできなかった夫婦の契りがうらめしくて、宮がどのよう





軸測図法の形式　小山清男「絵画空間の図学」より



小山清男「源氏物語絵巻の室内描写とその構図について」
（『東京芸術大学美術学部基礎第２研究室研究論集』１、1959年）

資料１６

高２国語（古文）　夏休みの課題その他　　　　1992・07・09　石井

夏休みに次の課題を行ってください。

1）内容……『古典文法基礎レッスン』の３２～３９ページの予習。

2）期限……9月3日（木）　午後3時15分まで
　　＊遅れた場合は減点する。

3）評点……2学期の評点に7点満点で数える。

この間、時間があると思うので、2学期の授業で扱う『源氏物語』を、作家たちの現代語訳で読んでみてください。将来、大学の国文学科にでも行きたいという希望があれば楽しみに取っておくのもよいでしょうが、この夏休みに読まないと、永遠に読むチャンスを失います。決して原文で読む必要はありません。近代の作家たちが全精力を注いで訳したそれは原文に劣らぬ力を持っています。ちなみに、安く買える文庫は、次のとおりです。

与謝野晶子『源氏物語』（角川文庫、３冊）
谷崎潤一郎『源氏物語』（中公文庫、５冊）
円地文子『源氏物語』（新潮文庫、５冊）
田辺聖子『新源氏物語』（新潮文庫、３冊）

こうした現代語訳で読むのがベストなのですが、百歩譲って、最低、次のような解説だけでも読んでください。

秋山虔『源氏物語』（岩波新書）
秋山虔『源氏物語』（教養文庫）
鈴木日出男『はじめての源氏物語』（講談社現代新書）　宇治十帖などは省略

くりかえし言いますが、今が、たぶん最後のチャンスです。だまされたと思って読んでごらんなさい。

ついでに、上野千鶴子『マザコン少年の末路』（河合ブックレット　５２０円）は、某予備校での講演です。この本も読んでみるとよいでしょう。特に心配な人は。

おわり

源氏物語アンケート（1）　　（ / ）組　40名　　1992・10・14　石井

①源氏物語の内容を知っていますか。一つだけ「○」を付けてください。

アだいたい知っている　10
イ少し知っている　23
ウまったく知らない　6
無　1

②自分で、少しでも源氏物語を読んだことがありますか。一つだけ「○」を付けてください。

アある　27
イない　13

③②でアと答えた人は、何で読みましたか。いくつでも「○」を付け、（　　）の中も記入してください。

ア注釈書　（書名　　　、出版社　　　）　2
イ現代語訳（訳者　　　、書名　　　、出版社　　　）18
ウ参考書　（著者　　　、書名　　　、出版社　　　）0
エマンガ　（著者　　　、書名　　　、出版社　　　）8
オ解説書　（著者　　　、書名　　　、出版社　　　）3
カその他　（著者　　　、書名　　　、出版社　　　）1
夏休みにテレビを見た　1

④②でアと答えた人は、なぜ読もうとしたのですか。いくつでも「○」を付けてください。

アおもしろそうだから。　7
イ先生に勧められたから。　18
ウ受験に役立ちそうだから。　0
エ成績の向上につながると思うから。　0
オなんとなく。　7
カその他（　家にあったから　3　）

⑤②でイと答えた人は、なぜ読もうとしないのですか。いくつでも「○」を付けてください。

アおもしろそうでないから。　4
イ先生に勧められても、面倒だから。　1
ウ受験に役立ちそうもないから。　0
エ成績の向上につながらないと思うから。　0
オなんとなく。　7
カその他（　　　）
つまらないと聞いたから　1
内容についていけない　1
忙しくて読む暇がなかった　3

アンケート資料１

源氏物語アンケート（2）　　（ 1 ）組　39名　　1992・11・11　石井

５時間の授業で学習した範囲で、①～⑪について、ア～ウの中から選んでください。

①桐壺帝の後宮の様子について
アわかった　13　イノートを見ればわかる　24　ウわからない　2

②光源氏を臣籍に降下した理由について
アわかった　20　イノートを見ればわかる　12　ウわからない　7

③結婚のタブーについて
アわかった　19　イノートを見ればわかる　17　ウわからない　3

④光源氏の「色好み」（折口信夫説）について
アわかった　15　イノートを見ればわかる　17　ウわからない　6

⑤六条御息所の生霊について
アわかった　28　イノートを見ればわかる　8　ウわからない　3

⑥光源氏の道心（出家しようという気持ち）について
アわかった　22　イノートを見ればわかる　12　ウわからない　5

⑦「貴種流離譚」（折口信夫説）について
アわかった　15　イノートを見ればわかる　11　ウわからない　13

⑧光源氏の「潜在王権」について
アわかった　17　イノートを見ればわかる　15　ウわからない　7

⑨「罪」と「出家」の関係について
アわかった　26　イノートを見ればわかる　10　ウわからない　3

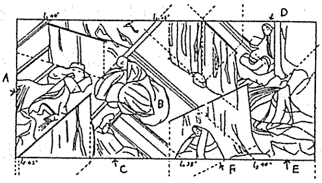
⑩六条院という家の構造について
アわかった　15　イノートを見ればわかる　22　ウわからない　2

⑪六条御息所の「鎮魂」ということについて
アわかった　20　イノートを見ればわかる　12　ウわからない　7

源氏物語アンケート（3）　　（　）組　　1992・11・20　石井

次の問いについて、答えてください。

①下の『源氏物語絵巻』柏木１の中のA～Fの６人の人物はだれか。



A（　　　）
B（　　　）
C（　　　）
D（　　　）
E（　　　）
F（　　　）

②上の『源氏物語絵巻』柏木１の描き方は、下のA～Dの形式のどれか。

A形式―――軸測投影図法的に表現されたもの。上下の方向にある直線が垂直に描かれ、水平な両辺がいずれも水平線に対して傾斜してあらわされるもの。
B形式――斜投象的な表現のうち、奥行方向の線が右上に向って引かれるもの。
C形式――図法上はB形式と全く同じであるが、奥行方向の線が左上に向って引かれるもの。
D形式――平面図を画面として斜投象的に表現されたもの。この場合平面図が実形となり、上下方向の線は垂直に描かれる。

（　　　形式）

③なぜこのような描き方をしたと思うか。考えられることを自由に書いてください。

アンケート資料２

4．おわりに

教材が固定的であるがゆえに，また古典作品それ自体が安定した位置にあると思われているがゆえに，古典の授業は比較的楽であるという声を時に耳にすることがある。しかしそれは誤っている。〈現在〉が常に変化している限り，そこに生きる我々と古典との関係も一定であるはずがない。その意味において，たとえば『枕草子』も『徒然草』も安定教材と呼ぶことは憚るべきであろう。（そもそも古典に限らず，現代文においても，安定教材というものが存在しえるのだろうか。安定教材という用語を安易に用いることは，とりもなおさず〈現在〉を等閑視していることと同義であると考えられる。）我々が問題意識として持たねばならないことは，古典作品をある固定した位置に無理やり押しつけ，そこを出発点とするのではなく，古典の授業の出発点が実は常に動いているということではないだろうか。今回実施した『百人一首』に関する調査に即して言うと，「百人一首かるた」が自分の家にないと答えた生徒が３割を越えている。この３割の生徒は「坊主めくり」もやったことがないのであろうか。『百人一首』をどの程度覚えているかということの前段階に，「坊主めくり」という遊戯を３割以上の生徒が経験したことがないらしいという推定が成り立つこと，これは古典の授業の出発点をどのあたりに置くかを考える１つのよりどころになるのではないか。即ち，「坊主めくり」という遊戯が（たとえば「姫めくり」ではなく）まさしく「坊主めくり」であることの意味を考えれば，「坊主めくり」を通じて形成される「坊主」に対するイメージ，「坊主」という語自体の語感は重要であり，それは古典に少なからず登場する「僧・法師・坊主」の人物形象読解の一助となるはずである。しかし「坊主」という語に何のイメージも持ち得ない生徒も確実に存在するという現状認識，これが古典の授業を組み立てていく上で（たとえば『徒然草』89段「猫また」の話に登場する「連歌しける法師」について考える場合）１つの出発点になるのではないだろうか。

授業の実践報告については，その具体的意図は本論で既に述べたのでここでは繰り返さない。１つ付言すれば，今回の試みが古典の授業として有効であり，すぐさまどの教育現場においても通用するものであるとは我々は考えていない。そもそも固定化した授業マニュアルという発想は，ここまで述べてきた問題意識とはまったく相容れないものだからである。我々のねらいは，古典授業の硬直化を避け，流動する〈現在〉と古典とをいかにダイナミックに切り結ぶかにある。そのために何を出発点に置き，どのように組み立てるかが常に問われることになる。それに対する１つの可能性の追求としての試みが今回の授業案である。来年度もこうした試みを続けていく予定である。より多くの御叱正を乞う。